日本書紀傳 十卷一

十八

和書
一〇五二二號

内閣文庫
番號 和 10522
冊數 156 (27)
函號 特 85 1

内一二六八三號

国立公文書館
National Archives of Japan

教部省文庫印

内閣文庫

内閣文庫

第六

日本書紀傳十之卷

神代上第八　四神出生章　穂積重胤　謹撰

一書曰伊弉諾尊與伊弉冊尊共生大八洲國然後伊弉諾尊曰我所生之國唯有朝霧而薫滿之哉乃吹撥之氣

内一二六八三號

国立公文書館 National Archives of Japan

化爲神號曰級長戸邊命亦
曰級長津彦命是風神也又
飢時生兒號倉稻魂命又生
海神等號少童命山神等號
山祇水門神等號速秋津日

命木神等號句句廼馳土神
號埴安神然後悉生萬物焉

此一書ハ古事記と大凡同ト傳ふて八洲起元章等一、
一書ふ續けらるゝ其終ふ由此謂之大八洲國矣を承
て此ふ共生大八洲國然後云〻と下を起せるを以て
其文脈有を知べきなり但古事記と同ト傳さハ云物
ハ有けれ目ふ至てハ大同ス異なるも小同大異ふ
るも雜れるゝバ必一ゝめ〻てハ說べ〻ざる事ふむ多
左ケ ○共生大八洲國ハ正書ふ吾已生大八洲國及山

川草木と有ふ同ド所なるが彼ふハ何不生天下之主者歟と云語ふ續く可き用有を此ハ天下國土の成れる其大凡を云て次なる然後より以下ハ繫要と有る故ふ然すで大八洲國の數ふ用無れるも事の序次ふ置る ふて古事記ふ既生國竟更生神と有る國ふ同ド鎮火祭詞ふ二柱神妹妹二柱嫁縒給氏國能八十國嶋能八十嶋子生給比云と國とも嶋とも先云ると同ド例なり

○我所生之國の之ハ過去の志辞ふて高て訓べき所ふ古の古事記ふ既生國竟云と第十一書ふ吾與汝已生國矣奈何更求生子ふどの既已字と同ド意味なる所なるなり然れば此ハ大八洲國を已ふ生給ひ竟たる後なるふて引續

ける即ふハ非ちなり其ハ二神大八洲國を生坐て共ふ任給へれども朝霧の深く薫り滿て在しかば吹撥ハで い得有まどく成れるふて是風神の成坐る所以なり凡て二神の御上耳なるず神代の趣を考るふ御親如此も有ると思ふ〳〵立せる方ハ少くして時の勢の已ふ必然爲ずて叶ふまどく事の迫れるふ詔て止事を得ずして其行ひ給へる事共の終ふ甚ト き御功と成れるハ全く皇祖天神の預鎔造せる理ふ因れる者なて人事の上ふ於ても然り神習ひも輩能く思ふ可くなり

○朝霧ハ傳七九十九丁天霧の下ふ註せる如く佐藝理と訓べし其佐ハ眞ふ同ドく殊ふ狹く其物を指云ふ時の發語なる事人の知れるが如し万葉四十六丁

ふ且暮乃且霧隱十三十七丁ふ明闇之朝霧隱十二十一丁ふ

曉之朝霧隱、十五丁に安可等吉能安佐宣理其問理
あど其餘ふも集中ふ多く朝霧又ハ旦霧とも書るハ
旦ハ暮ふ朝ハ夕ふ對へるるハ正しく朝を阿佐と
訓べきるれども此ハ唯ふ佐と訓て狹の意ふ見べし
古事記の神名ふ天之狹霧神國之狹霧神見元此の瑞
珠盟約章ふ狹霧と云語有る其を例と爲べき首るう
同じ神名の中ふも式ふ大和國城下郡池坐朝霧黃幡
比賣神社同大月次相嘗新嘗と有る朝霧ハ蔦枕高御
産巢日神ふどの例ふて發語るるが阿佐藝理と訓べ
き古の万葉ふ旦霧隱と同じ續きるるを思ふふ黃
幡ハ許波多と訓も所ふるる因云此神の御事諸書
ふ所見無を今此考成て思ふふ許波多ハ木幡ふて仁
德天皇四十年御紀歌ふ此佐箇多能阿梅箇難麼多と
有る金機の對ふる然れバ天忍穗耳尊の后五依姬命

の御母栲幡千々姬命ふる可し然思ふ由ハ神名式ふ
山城國宇治郡許波多神社三座並大月次新嘗と有と
釋述義ふ載たる山城風土記ふ宇治郡木幡社名天忍
穗根命と有て餘神の事を漏せるも右の二神を合
すれバ三座と成て實ふむ事ふる此を以て右
の池坐神ふ同神ふるるもとハ云ふる但此ハ此ふ用無
き事ふるから思出る事と其時云ハでハ忘るるとふ可惜
しくてゞ猶傳　天孫降臨章ふ就て云を待ハ
偖此朝霧と云物ハ傳三九十三丁豐斟渟尊の傳ふ註せる
ゞ如く國常立尊の神德ふ資て一歲の公運有り豐斟
渟尊の靈威ふ依て一日の私運有ふ其公運ハ天日を
中央ふ爲て其周圍を旋り私運ハ天日の光輝ふ牽れ
て動めらゞ其二共ふ天日を天柱の如くして旋動ひ
事ふる故ふ自然ふ其熱氣ふ蒸ふて此大地中ふ含在

わる水氣の大虛に薫満る物にして祈年祭詞に謂ゆる青雲能霭極云々と有る是なり此事委しく其所に云れば今云ふ限に非ず引合せ讀て味ひ可し若て國土を生成坐し初は水陸の界の立けり任みて土氣なりは水氣の甚しきなれば今瞻望る如き碧空なりけるが上に風氣の往來ふと云事なども非りしなれば濛々として甚く鬱悒き事なり〻〻已に天孫降臨の後と雖も日向風土記に曰杵郡内知鋪郷天津彦火瓊々杵尊云々而天降於日向之高千穂二上之峯時天暗冥晝夜不別人物失道物色難別於茲有土蜘蛛名曰大蜘小蜘二人奏言皇孫以尊御

手投稲千穂爲籾投散四方必得開晴于時如大蜘等所奏搓千穂稲爲籾投散即天開晴日月照光云々と有る事の趣に思ひ准らへて當昔の狀を想像ひ奉る可くなり凡て人民稀なる地に等しく天日の光を稟ること雖も濕氣深きが故に狹霧の甚く濛々と爲る者なり近くは蝦夷の地方なども濛氣の薫満るが故に晴天こと云事は年内に僅計の事なりしを近年諸國より人共多く渡りて地方と開くに就て松前近邊の地は出羽成以て行て其濛氣の所に入の口氣退けるなり〻〻

△源氏夕顔五に御袖の匂も其所狹き鬼薫物心にくく紫式部日記に薫物の出名醫の香なども匂満て濛氣御濯の立隱たるを云なり薫を立添て橋姫に薫満て橋姫に此せの外の匂ひ六に鹽氣能味香辛禮流て多く給へりなど有り國俗此般若大同類聚方一に可遠離とも伽遠利とも

△源氏夕顔五に御袖の匂も其所狹き鬼薫物心にくく紫式部日記に薫物の出名醫の香なども匂満て濛氣御濯の立隱たるを云なり薫を立添て橋姫に薫満て橋姫に此せの外の匂ひ六に鹽氣能味香辛禮流て多く給へりなど有り國俗此般若大同類聚方一に可遠離とも伽遠利とも

△万葉十四に不薫能祢乃伊尼等保奈敢伊尼毛伊毋教理登信濃氣に餘濃受高嶺と山深き所あるじ中に人せの人うと雖も氣に隔て事に有ハ日光の照さぬ故なり

信吉

れる水氣の大虛に薫滿る物にして祈年祭詞に謂ゆる青雲能霭極云々と有る是なり此事委しく其所云れば今云ふ限に非ず引合せ讀て味ハふ可し若て國土を生成坐し初ハ水陸の界の立ける任みて土氣より水氣の甚しきうれしば今瞻望る如き碧空なりけるが上に風氣の往來ふと云事なども非りしうば濛々として甚き欝悒き事なりしに已に天孫降臨の後と雖も日向風土記に臼杵郡内知鋪郷天津彦火瓊々杵尊云々而天降於日向之高千穂二上之峯時天暗冥晝夜不別人物失道物色難別於茲有土蜘蛛名曰大蜘小蜘二人奏言皇孫以尊御

二ツ葉十四ノ不盡能神乃伊豆等伊豆奈武伎夜麻治乎毛伊母教理登信濃奈氣ノ餘婆受高取と山深き所なれども人せの人うと雖も氣ノ降ノ筆ノ有ハ日光の照さゞる故なり

△神樂弓ノ伊勢嶋也立ノ伊勢嶋也立万乃乃神等賀多久保乃乃神等賀多久保乃乃ノ伊曽夫賀喚ノ波ノ五十鈴河布ども百ノ又△

手拔稲千穂爲叙授敬四方必得開晴于時如大蜘等所奏搓千穂稲爲叙授敬即天開晴日月照光云々と有る事の趣ノ思ひ准らへて當昔の狀を想像ひ奉る可くるも亢て人民稀なる地ハ等しく天日の光を稟と雖も濕氣深きが故ノ狹霧の甚と濛々と爲る者なり近くハ蝦夷の地方ふど濛氣の薫滿るが故ノ晴天と云事ハ年内ノ催計の事なりしを近年諸國より人共多く渡りて地方と開くノ就て松前近邊の地ハ出羽陸奥の國々ノ然しも異くず成以て行て其濛氣の所在ハ次第ノ奥ふり退けりとゝ故思ふノ衆人の口氣を吐くノ壓れて石の如く濛氣ハ退けるるゝ也り

○薫滿之哉ハ校霧の深く立隱りたるを云ふり薫を迦遠流と訓ひ例ハ万葉二ノ廿六ノ鹽氣能味香乎禮流國ノと見亢大同類聚方一ノ可遠離とも伽遠利とも

三代實録に貞觀十六年大宰府言薩摩國從四位上開聞神山頂有火自燒烟薫滿滿天云々と有り

假字かて書たれば此等を正しき證とは爲べきなり氣を大祓詞に高山之伊穗理短山之伊穗理と見えたれば此も迦穗理なるべけれども思ゆれども容易く改めがたし

薫滿とは大地全体の水土の氣天日の陽氣か薫蒸されて大虛に升り其即謂ゆる朝霧にて其半天に霑き度れるを云なり薫を迦遠流と云い物に出る氣を香と云ふ遠流は曲折れて四方上下に延て至ると云て滿とは其甚しきを云なり此を以て此時の霑氣の今世の狀とは寔に殊なりて狀を思ふ可き者なり或說に薫は霧合なりと云れども如何に迦と云い加字の字音の如く心得たるなり其は香なり已に魚仁天皇御紀に香菓此云菓俱能未と注し

古事記明宮段大御歌に迦具波斯波那多知婆那と詠せ給へれば文字の渡來れる前に已に香を迦と云語の有しを事を知べし万葉二に香青生玉藻息津藻五に美奈乃和多迦具漏伎可美に青に黑に上に迦の言を冠て云い青きに在れ黑きに在れ其色の甚しき時は其氣韻の出て邊りも青く黑く見ゆ計なるが故に云て香の語と本一なるなり又人の面を迦富と云も然り人身の氣即表に出て見ゆる故の名なり迦は香に同じ尚海宮遊行章第二の一書天垢地垢の傳に云べし

○吹撥之は伊弉諾尊の御氣息吹て半天の霑氣を吹靡け撥却給へり

なり大祓詞に科戸之風乃天之八重雲を吹放事之如久朝之御霧夕之御霧を朝風夕風乃吹掃事之如久と有をも併せて吹撥給へる狀を知べし吹と振と同じ背揮の下に云べし此正書の安忠を伊夫利と訓も氣吹に同じき由傳八卷に云なり万葉二に麻呂歌に朝羽

振風社依米夕羽振流浪社来縁と有り羽振も羽吹と同ドき事云ひ更なり万葉ニ多く山吹を山振と書るを思ふ可きなり諸瑞珠盟約章ニ吹棄氣噴此云浮枳于都屢と註されたる吹棄と此の吹撥との差異を如何ぞと云ふ吹棄ハ緩みて吹撥ハ急なり故其吹棄給ふ方ハ氣噴之狭霧を生給へりと此の吹撥ハせるハ薫満たる朝霧を掃ハせ給へり今も此を試るに口中より緩く息を出せバ暖かして氣を生ず急に息を吹けバ冷かなり唯風耳出るを以て考ふ可きなり○氣ハ息なり舊訓の仕ハ美伊伎と訓べし万葉ニ三十九丁ハ氣衝明と有を五三十八丁ハ息豆伎阿可志と見え又四四十二十四丁八三十丁十二三十九丁ハ氣緒と有を十一四十一丁ハ生緒と有を以て

氣を伊伎と訓べく思定め可し字鏡集ハ又名義抄ハ氣を伊伎とも祁波比とも有り記傳五風神の下ハ此文を引れたる二巻人麻呂歌ハ神風ハ伊吹惑志と有を證と爲られたり伊夫伎ハ古事記ハ氣吹と作き大祓詞ハ氣吹戸とも氣吹戸主神とも吹字を添て書れ又瑞珠盟約章ハ氣噴と伊浮岐と有が如く一字を伊夫伎と訓べきなり例ハ共ハ氣息の名なり其内伊伎と通ふなり故伊氣と云ハ殊更ハ態と吐ハく方なり事古の氣噴ハ態を以知べし伎ハ字音の氣と言意同じくして大虚の空氣を云称なるが此を合せて伊伎と云時ハ大虚の空氣を射て進み動揺ス義なり然れバ伊弉諾尊の朝霧ハ應へて出し給へりし御氣が即風と成れり元ハ合へり

語あり〻又伊伎を淤伎とも云ふ欝悒字を伊夫勢
志と云を淤煩保志とも云ふ同ときあり借思ふ伊夫勢志い氣
伏ふて氣の伸ずる由あり万葉ふ氣衝と云語の多く
見えたりふ合せ思ふ可し又休息を伊古布と云い氣
交ふて氣息を吐納る程を云あり安思い氣振ふて氣
の眞正るぬあり万葉十一ふ所嘖と伊佐波禮と訓
る即氣障あり偽を伊都波理と云も氣留ふて正しく
云べき方無ふ故の名と聞ゆ又先師説の如く命ハ氣
内活ハ氣有あり此ふ依て又思ふ賀い氣延齋ハ氣
裹ふて何れも氣を本ふて言を成せるもの此類猶多
在り
可し神武天皇御紀大御歌ふ伽牟伽笠能伊齊能于涙
能と續けさせ給へるハ此の故事ふ根據せ給ひて神
風の息と續けるあり冠辞考ふ神風の息と云へるを
略きて伊の一語ふ云係たるあり」と云れたれど然ふ

非ず借右の如く神風の氣と云續るる所由ハ〻も實
ふ天地の間ふ吹通ふ風ハ〻も元來此吹撥ハ〻〻御
氣ふ起りて天地を保有つ所以の者あり此ふ因て成
生る風神の御名を天御柱命國御柱命と申して宇宙
ふ生活る萬物の全ハ風を以て命を保てり譬へバ風
ハ人の呼吸の如し呼吸無ればすなわち出絶えて弊るる事
魚の水を離れて死るふ同ときあり然れバ大神の御
氣より神風の吹起れる古語有を用ひて右の大御歌
ふ然語ハせ給へる者あり けり印度の古説ふ所有一切命非命物皆從自在
天生從自在天滅自在天身者虚空是日月是眼地是身
河海是尿山丘是糞火是熱風是命一切衆生是身内

蟲自在天常生一切物と提婆論と云書に見えて風是
命として一切萬物の命の係る所と爲るハ我古傳に
契合へり思ふに釋述義の攝問に異朝者有巨人盤古
霞復則爲天仰則爲地觀則爲晝瞑則爲夜壽八万歲死後
目爲日月骨爲金石胎血爲江河毛髮爲草木云々と有
ハ三五曆紀を引せ給へる多くが石の提婆論も此を
取て文を成せりと聞ゆれバ三五曆紀の本文ハ呼
吸爲風ふぶの語有て可て列子ハ唯ふ大塊噫
氣其名爲風と耳有り

○氣化爲神ハ大神の御氣が即風と成て
大虛の積氣を動搖して初つるハ其風を掌る神ハ成出
坐りとあり 猶此風神の成坐て所や如何と云ふ決く
礙馭盧嶋ふり何を以知ると云ふ此段の初ハ云こ共
生大八洲國然後伊弉諾尊曰我所生之國云々と有ハ
大八洲國を生巡り竟て其嶋ハ還坐ての御事ふる由

ハ然後と有りて著明けれハ是即一證ふり 其ハ八洲起元章第
一一書ハ此一書の續ふる由已ハ云ふが其一書ハ二
神政復巡て柱と有と次て大八洲國を生坐る其宮ハ必
還坐せ給ふ可き理ふるハ非ずや 又其一書ハ二神降居彼嶋化作八尋
之殿又作豎立天柱と有る其天柱を正書ハ國柱と有を
舊事紀ハ國中之天柱と見えたるハ風神の御名を天
御柱命國御柱命と負坐る事ハ專其生坐て域ハ依る
ハて是即二證ふり 彼嶋ハ二神初て天降坐て國
中之天柱と齋ひ立給へる所ふれ
バ天氣の初て降り所地氣の初て昇り所ハて天地
の氣の相感初たる所ふれバ風神の生坐る事疑ハ幽
契有る事ふり 又此正書ハ天照太神の御生坐て時の御事を
記さ好たるハ故以天柱擧於天上也と有れバ日神ハ

國中之天柱と齋立給へり磯馭盧嶋の八尋殿かて
御生坐し御事傳八二十五丁か註るが如きを以天柱擧於
天上也とハ風神を以て送上奉らせ給へる古傳なる
由傳八四十七丁か云るを見て知べし是其三證なり又理
か於ても天下の風氣ハ其嶋より初りて國の八十國
嶋の八十嶋の隈くか吹及び至る可き筈の事なる者
を如信ミなハ成難けれども傳六か引る宋杜光庭か
立瀆名山記か東岳廣桑山在東海中青帝所都と
有か依ハ東岳ハ我磯馭盧嶋か富なるを其青帝と
ハ木帝と云事なて風木神なるハ東岳を青帝の都と
云事も由縁無き事なハ非ざるなり○號曰級長戸邊命
山蔭か級長戸邊命ハ女神の名なるか亦曰級長津彦命

賀茂菊の古事記
日本紀五ひと一神脱たる可し」とれなるやくなる

命とハ如何と云れたる實か怒る言なり古事記かハ
既生國竟更生神云くと次生風神名志那都比古神と有
て女神の傳無く比かハ女神の傳有て男神の傳ハ慥
なるべきなり故か亦曰とハ記されたるなるめり正しく
ハ號曰級長津彦命吹次級長戸邊命と有べき文なり怒
を山蔭か女神と爲るも男神と爲るも又男女二神と
爲るも各一の傳なるべしと云れしハ思ひ漏されたる者
と見ゆ古史徵か風神祭詞か吾御名天乃御柱命國乃御
柱命云と龍田乃立野乃小野か吾宮波定奉氐云と
有て下か奉宇豆乃幣帛者比古神か云と比賣神か云
と有ゆて賀茂菊も言れたる如く男女二神なる事

灼然」と云れたる實に動くまじき說なり其は大和風土記に平群郡立野郷郷中有神社龍田大明神是也所奉祭級長彦神也と男神の御方を以傳たれば女神は配坐る事灼然きを二十二社注式奥入に本紀曰神代尊號級長戸邊命級長津彦命是風神陰陽両神也大和國龍田坐須龍田彦龍田姫神代與奇利跡風神の本社奈利と見え遠江風土記に澤井神社所祭級長戸邊級長彦也とも有て此二件共に此御紀に依て女神を先に男神を後に擧たるこそ錯乱(ミダリ)なれ男女二神に坐事是分明しき証文なる者をや神名式に和泉國和泉郡級長戸辺神社二座と有て攷國志に祭紀先師風神級長津彦命級長津姫命と有は舊社傳なる可し式に被載ざれども周防國佐波郡勝間神社と云ふ古社有り本殿は宗像三女神相殿豊玉彦命保食神級長津彦命級長津姫命水分神と傳へたり此事景行天皇御紀十二年の傳なれども就て其說は漏せれども風神の男女二神なる証に云なり又此二を以て級長戸邊命に申す御名有る事とも思定め可し又此に例し級長戸辺命と申す御名有る事べき事を曉り可し○級長戸邊命記傳五四十三丁に纂疏に級長猶言息氣長也と有り(其由は師說に冠辭に)此神は大御神の御息と成給へば級長と息長と同じ事なり万葉歌に忘長鳥と云は鶺鴒(ミソドリ)の事にて息長鳥と云は(に同)如ト同世四十九丁に爾保抒里乃於吉奈我河波と續け詠るを以知べし此鳥水底に入て久しく在て(る事は)息長き物の能鳥る

事あるが如き然云係しあるも息長河ハ近江國坂田郡か
り天武天皇御紀か近江軍戰息長横河と見元諸陵式
か息長墓近江國坂田郡と有り（右の歌の端書於河内國仮人云之家尊歌ども有）然れば近江かた詠り
古歌を河内かた寛か謠ひしあるも又河内國石川郡
の磯長も本息長（オキナガ）の略かしかも有むりと有り」神名式
か同郡科長神社有れば風神の御名か依れる地名か
しひふハ實か磯長ハ息長と同意あるる可し此か引り
ハ其元書か校合せて今取捨せれば同トりずと知
べし其ハ古の磯鷸（礒鷸）の事と記傳か此鳥水底かへて浮
出てハ長く息づく故か云と有と此か冠辭考の
今一説を取れる類なり又記傳か式内近江國坂田郡の伊香（伊香振神社）
夫伎神社並びて載れる日撫志那都語近江」と云れた
れども姓氏録諸蕃か伊香振直と云氏見元たれば其祖

神あるとかも有べく又伊夫伎神社ハ色葉字類抄か祭
神氣吹雄命と見元たるを帝王編年記か霜速比古命
之男多々美比古命是夷服岳神と有れば別神なり借
古の息長河と云も風神か依れる地名かい有べう
ず（礒鷸）鷸の多在る故の名かもや有む和名抄郷名か野
洲郡近保在南北と見元中昔より其湖と近保湖とも
云ふと思合す可し此か就て思ふか奥と云ひ沖と云語ハしも
本古の息すう起れるあるむう其ハ山か奥山と云ひ
海か沖中あると云も我か方へより遠か遠放りて有が故
か唯氣（大空と一か）の薫う滿隔りて慥か其形容の見元ざるを以
て號けたるかもや有む其ハ神名の級長津彦命級長
戸邊命の津も戸も處字の意あるか級長を古の如く
息長と心得れば其級長戸と云ハ天津風の吹通か限

の大虚空を云称あれば山か在れ海か在れ遠き方ハ雲霧を隔てゝ虚空と一なり称と聞えたり然れば奥か邊と云ふ邊ハ方ふて我か眼前か其地所の有と云て其放ける方ハ唯其地〻ハ氣の方を主としてなる故其於伎をも伊伎をも約れば伊と成れゝば伊那とうゝ云べきか志那と云ふハ如何ふと云か嵐飄風風吹風氣ふど云時ふハ何れも氣を志と云て伊ハ云ざるゝと同例なるか故なり猶此類の語共を一二擧ぐ可し小竹ハ氣貫なり偲ハ氣伸なり忍ハ氣縫なり竅ハ氣弱挾ハ氣蕩又ハ氣消霊雨ハ氣旋霊ハ氣澁腫ハ氣凝凌ハ氣突温ハ氣飢かて何れも氣の進退か

就て成れる語例なるを思合す可し又風を許佐とも伊那佐とも云ふを知ふ轉ふして東風暴風なども云ふ又其をやうとも云ふ天地を万葉せ巻か阿米都之と詠れか志と知ふハ甚近き語なりけり若て級長戸と續く時ハ風氣の常在か吹處の謂ふて即此大虚空の事なり大祓詞か科戸之風乃天之八重雲乎吹放事之如く朝之御霧夕之御霧乎朝風夕風乃吹掃事之如と有て其義ハ已〻講義か証せるかハ〻ト源語榊卷か也其也の罪ハ皆科戸の風か共へてなど宣ふと有り那賀と訓べ〻ず古事記か志那都と有と證と爲べ〻戸も津も共か處の義なる由を予常か言痛き迄云ふ事なれば今註さず正書か生日神云〻以天柱擧於天上也と有ハ傳八四十七丁か註せる如

ムラ又堤中納言物語無由言巻か出立つ所ハ科戸の原の上の方か天河原の辺近く云〻と有を見るか科戸と云ハ大空の事と見えたり

郷 ○和名抄郡名に越前国坂井郡長畝幸字郷と有り

く此風神を以て天上に送上給へるが其に彼磯馭盧嶋の天柱〻〻送出し給へるなどを取総て思ふに級長に息長と云に同じき物〻〻其風氣の通ふ大虛空に天柱と太〻く立る階級有て神等の天地に昇降り給ふに何れも其に由給ふ事なり可し地上の上下り爲る坂路を志那と云も元其〻〻出たる可けれども幽事の方に隱りひて人此を得知ず成れりけむ〻〻推古天皇御紀歌に斯那提流箇多鳥箇夜摩尓と有を冠辞考に殷立の物に科に成延なる意にて片と續く〻〻なるべし山城國の山階と云所も坂路に依て階と云ひ越國に科坂左て冠辞の有も嶮しき坂なるとの階立る故と思し信野國を古に科野と書き其郡にも埴科更級有り波開科神社妻科神社なるなど式に見ゆ其に

山國にて級坂有れば地名と成けむをも思合す可し」と云れたる實に然る言なり級字を名義以て志那と也加佐那流とも訓り

○是風神也に風に氣迫る可し其に氣に天地の内に充塞て吹り出て及ばざる隈無き物なるべし或に山川海陸の形勢に隨ひて吹動す事に（春夏秋冬の季節に依て寒熱を成し或に）海中に浪の立が如く空氣の迫りて吹揺ぐるに言義を今考へて氣迫るるとは云るり其に夏に海上陸地を冷涼し成て冬に陸地より吹行て海上の空氣に交代るなど今現に見る所なり又難波の朝東風冨嶋の西北風日吉風又に伊吹風なるなど各其地方に定向れる風有て吹も皆各其空なる氣の迫りて動けるに非ず

神名式に大和國平群郡龍田坐天御柱國御柱神社二座並名神大月次新嘗に有り此を天武天皇四年御紀に

夏四月甲戌朔癸未ニ祠風神于龍田立野ニ見元四
時祭式四月條ニ風神祭二座龍田社ニ准此ト有リ此ヲ以テ
天御柱命國御柱命ト申スハ級長津彦命級長戸邊命
の亦名なる事灼然き者なり偖天御柱國御柱ト負坐
ます國中之天柱の許ミて朝霧を吹撥ハしゝ御氣ハ
因て成坐し所謂ハ縁れる御名なるを日神を天上ハ
送擧げ奉らしゝ其太御神の大御光輝を天地の
内ハ導奉らせる其大御德ハ由て一年と成り四時と
成り晝夜と成る事ハて寔ハ天地の相保る事なれば
天御柱國御柱と常在ハ動く世有る事無きハ皇太神

を輔相ひ奉給ふ神ハ坐が故なり其ハ太神宮式七月
雨と有る中ハ風神を聞ゆるハ後ハて所別宮の一ハ
ハども當昔ハ重く祭らせ給ふ社とも見えざるが如
くなれば已ハ神武天皇の大御歌ハ伽年伽筮能伊齊
と謠ハせ給へるを以思ふハ上古ゝ皇太神の鎮坐
べき其國ハ風神の坐し事ハハ決めて遊與有る事ハ
なりと思えなり又太神宮ハ心御柱と天御柱と称へ
て甚ハく崇奉る故實なりとも思べし然るハ二神の日神を天上ハ送擧
奉らしゝ風氣ハ載て擧給へりしゝ其返さひハ
大御光輝の四方八面ハ天照し及ぼせ給ふ事も亦風
氣ハ依るなり奇異ハ靈しき事なりける若て此間師
の古史傳を初て見るハ風ハ伊邪那岐天神の御息ハ
り起ればハ就て思ふハ凡人の氣息も即風ハて音聲

を爲し言語を成すも皆此神の恩賜なり此氣息を身に保ちて活らく間を生と云い息と同言にして命と云も息内と云言なる可く死い息去なる可し死る事を息絶るとも云なれども此義と聞えたり」と有るは信にたるなる説なれて人い更なれも云ず此天地の相保てるも皆氣中に在る事水中に嶋嶼の列れるが如し草根木皮の末迄も皆風氣を稟て生し蕃茂る事なり其ハ木草に限らず何に在れ生ずし活る萬物に風氣の通ふ理有て天地の氣を呼吸する事なり元天際至虛なれども天日の伸氣充滿ずして至虛なれども天日の伸氣出入て眞實なるなり如此く屈伸虛實と混ら唯一氣なる耳なるが故に此を以て風神の世に尊く御在す御事を知べし

偖右の言語を成すと此風神に係て註されたるハ古事記に下照比賣之哭聲共風響到天と有に依られたるなれども言語ハ人の靈の聲音に發れて彼の心を許すと到れるなり其ハ風神の未生坐ざりし以前に陰陽二神の天浮橋より天降給へるハ神靈の風氣に乘給へるなれて未現身なハ非ず後に日神ハ顕身なれて生坐しなれども天柱を以て天に昇給へるハ隱身を以なる可し人心の靈の佗人に到れるも思内に在れば色外に見ハれて聲音に出て言語と成を人も其を見るも迎入れて我心に合するも皆風氣の然る合ひ事なり

更ふ其外ふも色と云も氣ふ香と云も氣ふ味と云も氣ふ獨聲のミ氣ふふハ非ら事正
ふ知る人ぞ知ら〻ん偖此風神の龍田ふ鎮坐ら御事ハ其詞
ふ志貴嶋ふ大八嶋國知志皇御孫命乃云と〻有れバ
崇神天皇の大御代ふ於ハ御紀ふ九年春三月甲
子朔戊寅天皇夢有神人誨之曰云〻四月甲午朔己酉
依夢之教祭墨坂神大坂神と有ら其同時ふ事大忌
祭詞ふ所見有て已ふ其講義ふ說ふが如し此神の按ての事ハ
風神祭講義ふ委〻說盡せれバ今ハ其書ふ任わて記し漏さ○又神名式ふ大和
國平群郡龍田比古龍田比女神社と有ハ其ふ名ふ
其ハ廿二社註式奥入ふ本記曰神代尊號級長戸邊命

級長津彦命是風神陰陽両神也大和國龍田坐須龍田
彦龍田姫云〻と有と以知べし此本記ぞそハ大倭本
記ふどふや神代尊號
て風神の本御名を云ひとてふ
月諸卿大夫等下難波時歌二首白雲之龍田山之瀧上
之ふ鞍嶺ふ開子烏流櫻花者山高風之不息者春雨之
継而零者最末枝者落過去祁利下枝ふ遺有花者須臾
落莫乱草枕客去君之及還來と有ふハ風神の事と云
ざれども其反歌ふ吾去者七日不過龍田彦勤此花子
風ふ莫落と有ふ此ふハ正〻く龍田彦を風神の御名
と〻して顕せり其次ふ難波經宿明日還來之時歌并短

歌嶋山平射往廻流河副乃丘邊道後昨日已曾吾越来
牡鹿一夜耳宿有之柄仁岑上之櫻花者瀬之瀬後落墮
而流君之將見其日左右庭山下之風莫吹登打越而名
二負有杜ハ風祭爲奈反歌云々と有ハ右ハ龍田彦と
有と同ト事を詠るなり名二負有杜々ハ其龍田杜
を風杜なりと云けム事其續きを以知べし今も大和國
葛上郡紀伊國那賀郡なりハ風森社と有を也思ふ可
し記傳せ二次本毘賣命の下ハ云く後世の歌ハ佐保
姫と云事有り春の歌ハ佐保姫秋の歌ハ立田
姫と詠り是平城京の頃言出たる事なり可し立田ハ
平城の西ハ在て龍田此古龍田此也と申す神坐すハ
竜へて佐保ハ平城しより東ハ在を以て春ハ取て佐保
姫と云名を設たるなり可し西三條公條公の高野山

参詣記ハ奈良の邊の所ハ佐保姫社ハ参ハ
然り社也有ハ重倒今思ふハ右の立田彦ハ
正しく風神の其鎮坐す地名を以て祢奉る御名なり
ハ佐保姫ハ歌人詠物の料ハ設たるなりハ知らなども
若旧社なりハ物を生し立る事を
司給ふ神なりハ猶能考定ム可し三代實録ハ貞
觀元年正月廿七日備此社ハ今也立野村の本宮の玉
垣の内ハ右方ハ二社並立せ給へりと云り若此く同
神なりを異神の如くして別社ハ紀奉る事ハ天御柱
國御柱命と申すハ神代より受張たる本御名なりを
又別ハ龍田彦龍田姫神と祢奉る事ハ彼大御夢ハ誨
申給へる由ハ依て龍田の地ハ崇奉給へるハ即其地
を領坐す神として殊更ハ御名ハ奉りて給へる者ハ

ヵ同神ヵハ生せしも其異名を以て本社ヵ合せ祭る
ハ古の常ゝ大神神社ヵハ大物主命を主として
大己貴命を合せ祭ヵ大和神社ヵハ大國魂命を主と
して八千文神を合せ祭れるゝ猶其餘も此彼有

○皇太神宮七所別宮の一ヵ風宮と申す有ハ又ハ
風日祈宮とも申せるゝ此を古書ヵ稽るヵ倭姫命世
記ヵ風神一名志那都比古神廣瀬龍田同神也と有て
儀式帳四月例十四日神長祭の次ヵ同日以御笠縫内
人造奉御簑廿二領御笠廿二蓋即散奉と有ゝ中ヵ風
神社一具と見え太神宮式ヵ凡毎年七月日祈内人鳥
祈平風雨所須絹四丈木綿麻各十五斤五両六分云く
と有る中ヵ風神と出たる是ゝ但宮ゝ此を合祭
給ふと雖も當昔未

官帳ヵハ載れ給ハざりけり其ハ風日祈の時のみ
其祭祀ハ沙汰せられる計りしゝバ自然漏たるゝやう
有ヵ此ハ皇太神の高天原ゝ天降坐し時ヵ此風神も
供奉ゝて此國ヵ到坐るヵ其風神の御靈形ハ皇太神
の大御靈實と共ヵ高千穗宮ヵ移ゝ給へる後ヵも
此國ヵ御靈を留めて皇太神の五十鈴宮ヵ鎮坐ゝ時
を下待せ御在し坐しヵ名高ゝ故ヵ神風伊勢國とも
伊勢加佐波夜之國とも神代ゝ言継來るも風神ヵ係
なる國名ゝ可く所思元なり此神の御靈實の天降
坐けゝと所思る由ハ次ゝ外宮風宮條ヵ云べし冠辞
考ヵ仙覺ハ風土記を引て伊勢津彦の神風を起して
信濃國へ去しゝ神風の伊勢とハ云と云りしと契

沖が云らく神武天皇御紀を考るに戊午年十月に八十梟師を國見丘に於て擊給ふ時神風の伊勢海のと謠給へるが此天皇の菟田下縣に到給へるに同年七月に天日別命東の敵百里に入て伊勢津彦を平げ給へるを十月に至て天皇即神風の伊勢と詠せ給へる事信ト難しと云り契沖が論ひに實に云此て侍りけりと有に實に怨事なり

增鏡巻 光波 に弘安七四年に成ぬ夏の頃蒙古起るとりやうて世中騷ぎ立ぬ色々様々に恐聞ゆれば云々伊勢の勅使に經任の大納言參り云々太神宮へ御願に我御代にしも斯る乱出來に實に此日本の損りる可くに御命を呂べき由を御手自書せ給へるを云々閏七月一日夥しき大風吹て異國の船六万艘に兵卒乘て筑紫へ寄たる皆吹破られぬ

われば或は水に沈み自然殘れるも迯て本國へ歸りにけり云々太平記に弘安四年七月七日皇太神宮祢宜荒木田尚良豐受大神宮祢宜度會貞尚等十二人起請の連署を捧げて上奏しけるに二宮の末社風宮社の寶殿の鳴動する事良久し六日の曉天に及て神殿より赤雲一群立出て天地を耀し山川を照す其光の中より夜叉羅刹の如くなる青色の鬼神頭れ出て土嚢の結目を解く大風其口より出て沈漠を揚げ大木を吹拔く測知ぬ九州の異狀等此日即可滅を云事を事若誠有て奇瑞變に應ぜば年來申請ふ所の宮號以

敵愾儀可被宣下旨奏聞ける去程に元の万將軍七万餘艘の舫を解き八月十七日辰刻に門司赤間關を經て長門周防へ押渡る兵船已に渡中を指し一時忽に風止み雲開かりつる天氣俄に替りて黒雲一群退巽民方々より立覆ふと見えし風烈しく吹て逆浪天に漲り雷鳴震さて電光地に激烈す大山も忽に崩れ高天も地に落るかと夥しき異賊七万餘艘の兵船共或は荒磯の巖に當りて微塵に打碎られ或は逆巻く浪に打返されて一人も殘らず失ひけり」と有り此事神明鏡又弘安記に出たり大元同下ければ今擧ず度會元長神祇百首自注に云く人皇九十代後宇多院御時弘安四年の夏蒙古

預官幣二宮同第世代異國降伏之御祈禱也嘉元正慶元年之時被增作寶殿

亡宋の舩浦海に滿り旌旗日に耀り仍爲降伏使を遣はされ其上啓白しまして飛廉風を發して海上鳴動し神威を顕はし形を現はし光を放ち陽侯洪波を上りは異賊忽に退散す是則別宮風宮の神科長津彦命行向ひて元を集に引れける舊記に正應六年三月廿日官符政社號奉授宮號と見えたり自來六月九月十二月三時祭ふも必預給ふ例なる事年中行事記に所見たるが如し其詔文に度會宇治五十鈴河上下津石根大宮柱太敷立高天原千木高知皇御孫命称辞定奉掛畏風日祈皇大神廣前恐み申給ふと有て他別宮のふ恕しも異なる事無を以て其尊き崇まへ奉らせ給ふ朝廷の御趣けを仰奉り可くるむ又上代より日

祈内人と云ふ職掌の有も専此神に仕奉れりけ〻〻
儀式帳其職掌條に爲悪風雨不吹祈申告刀申進と有
れば未社號なし古より殊に重き祭りにしるけ
り但皇太神宮の日祈内人ありて其風雨を司る風
神に仕奉れるなり同帳五月例に五月四日年祈料
云〻古自七月一日始迄八月晦日日祈内人朝夕止悪
風五天下百姓五穀平助給止祈申又六月例に祈宜并
宇治内人日祈内人以上三人云〻祭刀日に告刀申天
下百姓作食五穀平助給止祈申又七月例に七月以朝
日受司幣帛祈日申行事右祈宜率日祈内人自一日起
晝晦日朝夕風雨旱災爲止停祈申又八月例に祈八月
風雨云〻祈宜率日祈内人爲風雨災鎮祈申と有と思
宜し又風日祈宮と申し日祈内人なども云意をも考合
せて可し○又豊受宮四所別宮の其一に風宮と申す有
り儀式帳又太神宮式に其社號見えずと雖も其帳の

八月例に祈八月風幣帛絹一丈五尺木綿一斤と有に
其風神の御料なりしなる可し倭姫命世記にも風神
と有て社をもさだめを神名秘書に風神社件神者内宮
風神與同體也と有れば舊き御社に坐けり神宮雜例
集に七月四日二宮風日祈祭事宮司下行祭物内宮進請文於
司廳日祈内人請之と有て内宮より日祈内人の祭來
る例なりし事知られる斯れば同書に四月四日風日祈
祭事大司下行祭物成符七枚在内宮請文日祈内人請
之と有り此に二宮とは云ども四時祭式に四
月四日七月四日風神祭る例に依れば此も二宮の

風神ある可き事推て知べきなり右の神名秘書の文の續らふ所謂欲令沙風不吹稼穡滋登故有此祭旧記云山谷水變成甘水浸潤苗稼得其全稔故有風神祭名曰柏流也豊年則浮流通山年則沈覆損云云四月七月祭之云有小神祇全の義解と集解とを取合せたる文なるが柏流神事と云ハ正しく有る事なり類聚神祇本源外宮別宮篇風宮條ハ社記曰正應六年三月廿日官符政社號奉授宮號預官幣依異國降伏之御祈也と有て内宮風宮の御事ハ同ト其後嘉元年間遷宮の時ハ被増作寶殿ヲと云れば此も内宮ハ同ト太神宮例文ハ弘安四年閏七月二宮正權祢宜等叙一階被載宣命御祈賞と有れば蒙古の襲來り一時の御祈ハ二宮共ハ在り事知べし偖上ハ註る如く内宮の風宮ハ神代より御鎮座ありるを外宮の風宮ハ雄略天皇

の大御代ハ豊受宮を丹後國より迎奉らせ給ひて度會山田原ハ鎮奉給へり時共ハ伊勢國ハ出生るを以若て内宮ハ古より日祈内人と云が有て皇太神宮の奉仕を兼て風日祈神ハ仕奉來れりを外宮の人ハ帳ハも式ハも其社の沙汰無して内宮より日祈内人の行向ひて祭る例なりを思ふハ丹波より迎奉れる風神の御靈形ハ内宮の風社ハ鎮坐せるを彼廣瀬龍田と並祭るが如く外宮ハても祭る事なれハ在しかども内宮より日祈内人の行向て祭るを思へば内宮の方の別社の如くなりつるを漸次ハ両宮の

差別愈甚しく成り故か終か外宮の攝社と成れり
ゞ神威の愈加はるか從ひて宮號宣下の事か迄か
至れりけむ〻然れば高天原〻天降り給へり風
神の御正體ハ正〻内宮の風宮か鎮坐るゝと甚
恐けれども想像奉らるゝ有り然るハ神名秘書か諸
物鳥神体例也と有て外宮の元ての別宮と成給へり
神と の神体ハ古の定の如くして奉仕る古例と通ゆ
れば有り其證ハ上にも引かゞ二社注式奥入か丹波國多
紀郡擇石窻神社二座本記曰神代尊號級長戸邊命級
長津彦命是風神陰陽両神也大和國龍田坐須龍田彦
龍田姫神代與利垂跡風神ゝ本社奈利豐受皇大神丹後國

與佐郡與名井原與利伊勢國山田原御遷座ゝ時御供奉
此両神陽神級長津彦命波伊勢山田原仁垂跡有利今
大神宮攝社風宮是奈利陰神級長戸邊命波丹波國多紀
郡仁留坐大芋大明神是奈利云〻と見元たる本記曰ハ
古く傳ハれる社傳ゝ可きか甚高〻しき說有り其
ハ此社ハ神名式か擇石窻神社二座並名神大と有れば御
門神二柱ゝ本宮か て風神の事ハ且ても所見無けれ
ども此傳か依て思ふか皇御孫尊の御天降の時か此
御門神の御靈と共か天降し給へり風神の御正體ハ
其擇石窻神と共か並御在し坐けるゝ古事記御天降段か登由

宇氣神を記して次天石戸別神亦名謂撕石窓神亦名謂豐石窓神此神者御門之神也と有を記傳十五に此社を擧て神代に天降し給へる御體は此社なるべし其説に就て今風神の御靈形齋祭りけむ」と云れたる事をも云に及べるなり然るに豐受大神を伊勢に遷し奉らせ給ふ時に神代の由緒に依れるなり又は御託なるとに依れるなりの事有て其御正體と共に風神も遷り出坐るに其〻神代より鎮坐す五十鈴河上の風神社に留坐る事古の文に今太神宮攝社風宮是奈利と有を以知べし

但山田原仁金跡と有は外宮の方なれども其なる以來風日祈の祭を爲るに其社地を定めて元なる祭りなれたりけむ事は朝廷にて大忌祭風神祭とて廣瀬龍田両社を一神の如く同月同日に並祭らせ給ふが如く親しき神等の御中間に渡らせ給ふ御事を以て思直し考ふ可なるなり然れば內宮を

本社にて外宮なるは其別社なるべし故に內宮なる日祈內人の其祭を預知れるに者なるべけむ又右の內外の風神の御事を上に擧たる如く諸書に志那都比古神と男神の御名耳を出せるも右に陽神級長津彦命波伊勢山田原仁金跡有利と有に合ひて聞ゆるに就て又思ふに陰神級長戸邊命波丹波國多紀郡仁留坐大芋大明神是奈利と有は女神の御體は故の撕石窓神社に留坐るが故に其なる大妹大明神と申すとなる可し然れば大妹と伊勢に坐す妖神に對へて申習へる社號にて今比も古の撕石窓神社の相殿に鎮り御

在る事決し者あらんかしかく同ト風神を祓祭るか
神宛を崇きて龍田の如く必二神を並祭るも非ら
可き事次〻か擧るを見て知べし右の内外ノ風宮も
一柱ゝて祭れる狀か見えたり　○又古事記か既生國竟更生神と有
る真神名十神の中か天之吹男神と有ハ級長津彦命
の亦名ある可し然ハ神名式か山城國相樂郡和伎
坐天乃夫支賣神社大月次新嘗と見えたるか（三代實録か）貞觀元年正
月廿七日甲申奉授山城國從五位下和伎神正五位下
と有て此時ハ唯神階の事のみあるを同年九月八日
庚申遣使奉幣爲風雨祈焉と有る中か和伎神も又た
ゝを以見れば正しく風神と聞ゆるか右の天之吹男

神か對ひたる御名あるハ女神級長戸邊命か御在す
可き事申も更なり和伎の地名の事ハ崇神天皇十年
御紀傳か註す可し此社を山城志
と云物か在淀尾村今称浦出宮と云ふ　○又古事記の右の續きか次生風
木津別之忍男神と有も其男神の亦名あるか混れて
別神の如く傳ハれるあり記傳五（三十五丁）か加邪宜都和
氣と訓て此の回我所生之國唯有朝霧而薫滿之哉乃
吹撥之氣化爲神云〻是風神也と云を引て風ハ神の
御息なれば風氣とも云べし末ハ借字津ハ助辭なり
偖下か別か風神ハ在れども此ハ別なる一の傳の紛
入し物なる故か重復れるなり」と云れたるハ實か然

ら言ふ（但彼水潔段ふ引合せて天之吹男を氣吹戸主神ふ此神と底筒之男命ふ當て說れたる）ハ何れも要〳〵ばうけう故其風木津ハ風氣處と云事ふて天津風の吹起る大虛空ふて上ふ云る（ゆ）級長戸と云る別ハ御父伊弉諾尊の吹撥〳〵し御息の風と成て彼薫滿たる朝霧を別散らかし給へる意ふる可く悪男ハ壓男ふて稜威の殊ふ勝れ給へる義と聞ゆる故ふ此ハ決く級長津彦命の亦名ふる可く思ふ侍う大祓詞ふ科戸之風ら天之八重雲ヲ吹放事之如く〳〵と有る語勢の甚りく嚴めしきを思ふ可し（和名抄ふ風暴風後下世又嵐山下出風也和名阿良之又暴風ハ夜知又乃和木乃加世又大風吹分雲飛揚此間云於保加世と有ふ）

ど（ハ何れも嚴めしき風ふるを思ふ可し）○風神社と思しくて神名式ふ出たるハ河内國石川郡科長神社有り此事上十一丁ふ云う又和泉國和泉郡泉穴師神社二座を和泉志ふ祭祀穴師風神級長津彦命級長津姫命と所見たり（姓氏錄和泉國神別天神ふ穴師神主天冨貴命五世孫古佐麻豆知命之後也と有ハ此神主ふる偖思ふふ（ら）古の冨貴ハ布佐と訓て風神の御名ふるふ其古佐も風名ふるし心田有て聞ゆるふ就て風神の御齋ふる〳〵むりぶも思ゆれども佗ふ然る證と云も非れば猶天冨貴命又信（伊）ハ天太玉命の孫ふる天冨命ふ有ざりける）

濃國那賀郡國御柱命神社と有ハ紛ふ事（方）も無風神の女神ふ渡〳〵給ふ事申まも更ふる同郡稻宮命神社田方郡廣瀨神社ふどの神坐ハ廣瀨龍田（両神等）の並給ふ例

〇帝陸國久慈郡稲村神社立跡神社有り其稲村神社ハ續後紀ニ嘉祥二年夏四月甲子朔庚寅帝陸國久慈郡稲村神預之於官社縁水旱之時祈必致感と有ハ全く廣瀬神と同神の歟ニ渡らせ給ふ歟ハ立野ハ右の龍田神と同神ニ御在し坐と思ふ帝陸國ハ社鎮御座ハ云書ニ今屬那賀郡在上小瀬村在云々今祠可五町立野山ニ所祭ふ級長戸邊命又曰級長津彦命與大和國平群郡龍田立野祠伊勢國風宮

ハ異ふ事ふ事ず右の稲宮命神社を伊豆國神階帳ニハ稲宮姫明神と有れば世神ふて以廣瀬神と同神ふる事炳然し同帳ニ國原姫明神と有ハ右の國御柱命の御名の略りたるべし又唱へ訛りたる者ふり又神名式ニ信濃國水内郡風間神社ハ風祭神社と申す事ふる可し上ニ引る万葉九ニ十一丁ニ名二負有杜ニ風祭爲奈と見え宇治拾遺四十二ニ三河國ニ風祭と云事を爲けりふと云ふと有れば ふり又袋冊子夫木集十訓抄ふどニ彼國ニ風祝と云者の有由ニ云るふど又證と爲べき者ふり此ニ就て思ふニ持統天皇五年御紀ニ八月己亥朔辛酉遣使者祭龍田風神信濃須波水内等神と有ふ此ハ其年ふも四月七月兩度ニ大御

同と有ニ思合せられ侍り三代實録ニ貞觀十六年五月十一日戊戌授帝陸國正六位上立野神從五位下と有ふ是ふり

使を遣ハされて大忌神風神を被祭たふ事御紀ニ所見たれば殊更ニ風祈の爲ニ今祭給へふふる可けれど龍田風神のごとふ有けれ須波水内等神ハ風祭ふハ更ニ由無き神ふるハ猶考ふ可き事ふれ然るハ須波神ハ神名式ニ信濃國諏訪郡南方乃美神社二座名神大と見え水内郡健御名方富命神彦神別神社名神大と有て共ニ大已貴命の御子建御名方命と記れふり伊勢風土記ニ伊勢津彦が八風を起し波浪ニ乘て東國ニ飛去れり所ニ伊勢津彦神近今來往信濃と有と混りて須波神と僻心得せる說も有れども其ハ據ふ足ず袋冊子ニ信濃ふる岐蘇路の櫻咲ふけり風祝ニ透間有すふる」と云俊頼主の歌ニ就て云く信濃國ハ決めて風早き地ふれば諏訪明神社ニ風祝

と云者を置て春始ふ深く物ふ籠置て祝して百日の
間尊重するあり偖其年風静ふて農業の爲宜きあり
其ふ自然遠間も有り日光も見せられば風治るず」と
有り然れば諏訪社ふ上代より風祝と云者有て其社
の祭祀を兼て風間神社などふ仕けむ狀ハ古ふ詠る
伊勢の日祈内人などの如く有けむ故ふ其本社ある
ふ就て須波水内等神ハ今祭給へるかとても有むら此
十訓抄七卷ふも出て能登大夫資基と云人の聞て俊文
頼朝臣ふ語ければ歌ふ詠たる由云り又夫木集ふ信
濃路や風祝も心爲よ白木綿花の白ふ神垣と有ハ正
しく風間神社ふ就たる歌あり此社今ハ幡宮と申し
て風間村ふ
在と云り
又阿波國美馬郡天都賀佐毘古神社と出

たるハ天津風彦神あるも可き由其ハ古事記風木津別の
下ふ訓風曰加邪と有と同ト訓るる可き所あるを以
云あり又此社ふ並びて天椅立神社の出たるも天椅
立ハ天浮橋と一物ふて彼國中之天柱を建給へり
基本あると又風神を天御柱命國御柱命と申す所由
をも思合す可し古事記日代宮殿ふ倭建命の御子の
中ふ建貝兒王官前之別等之祖也と
有るふ依て其祖神の如く云説の有ハ妄なる可し縱
ヤ官首と云ヶ有ひふも其ハ姓なるふ天の言と冠り
て神名と爲べき理無き事なり然れば又式外なれ
今説る如く天津風彦と云ふり外無し
ども遠江風土記ふ敷智郡澤井神社宣化天皇元年丁
巳所祭級長戸邊級長彦也有神家有巫戸等と有も舊

き御社あり猶此外にも國々に幾許の風神社と申す
社ハ御在すらん能く尋明めて奉る可くあるも但石の宣化元
天皇元年を丁巳と爲るハ二年の誤ハ非しり故今
其御紀を閲るに元年の終に是年也太歳丙辰と有り
○其始ハ詳ならざれども各國の地方に風神社ハ處
々に多在けれ共然れども社として別に建る事ハ無く
て森あるどよりや毎年に風祭ハ行ひけり大和國葛上
郡に風森村と云が有て其地に風森と云て崇め神に
き神南備の有も上世に風祭を爲し所なる可し又
紀伊國那賀郡にも風森と云有り又風市森とも云と
云り其名勝圖會に粉河寺の西南十八町許に在り官

符に西限風杜と云る是なり當郡の名所にて伊勢風
宮を遷し級長戸邊命と丹生明神と二神を祀りて粉河
河寺の地主なり當昔風市村と云り」と云るも石の例
なり大和の風森ハ嘉永三年夏京大和路を巡見けり
時に詣奉り紀伊の風森ハ同六年春日前宮に詣
なる還さに行見なり紀伊川に副て若山より大和へ
上る道の傍に木深く茂合たる森なり是神佐備たる
所なる稱德天皇御紀に神護景雲三年秋七月庚辰遣使
奉幣於五畿内風伯と有ハ石の風森の如きを被祭た
りしなる可し三代實録に貞觀十七年三月廿九日伊豫
國正六位上風伯神從五位下又元慶七年二月廿八日安
藝國正六位上風伯神從五位下と有を以國々に舊

くしの祭来れる事を知べし其中に神代より由緒
有て重く被祭させ給ふ御社も必有ぬ可き筈なり其
に其國人能探索てよらしし殊に伊豫國なるなどに和
と有るに如何なれも田百げなる又丹後國郡名の加
佐也風なるなれ神名式に阿良須神社と有に若くは
嵐と云事に非るう丹後旧事記と云物に祭神大
宮賣命と有れども其據を知ず偖古の風伯は唯風神
と云事を漢めらして書れたる者なり風伯を風師と
も云て風俗通に箕星也主鼓揚能致風氣と有れども
然る推量の空神に非ず又文選に飛廉と云物有う
王逸注に風伯也應劭云神禽能致風氣晉灼云身以麃
頭如雀有角蛇尾文似豹と百る怒る妖怪の禽獸とし
も風伯として我が風神の如く思ふのるに難も可き
事なり然るを斯しも正しき神代の古傳説を知乍も
猶漢轉りと信じて殊更に風神をしも風伯又に風伯
神なれど記されるこころ
甚く傍痛き事なるけれ予が知れるに出羽國田川郡

由
[illegible]の指儀の南に
祇園社と云有り曲百り
事ふくむに又

大社と云有り祭神
級長津彦命と云
傳へ云ふ

に揖尾神社と申す大社甚く榮えて立せ御在し坐
る其祭神級長津彦命級長戸邊命一座大物忌神月山神
を合せて揖尾三社大明神と申せるを飽海郡大物忌
神社の舊記に一王子揖尾大明神と有を以思ふに王
子とは其枝社の謂なる可し社傳ふに古此地飽海郡
にて神名式に謂ゆる小物忌神社と云れども其に其
所在の詳なるなる就て云出たる説なるも知べ
くなれば今定め云難し或説に小物忌神社は飽海
嶋有り其地に立せ給へる社即其海中に飛鳴と云ふに
其なりと云れども又明文無し彼社の年中行事を見
に正月七種式に九神前供御三膳と有に古の本社の

御料あり次大三膳小三膳調進之と有て内三膳袁賀
神社伊氏波神社由豆佐賣神社同三膳鹽湯彦神社波
宇志別神社副川神社同一膳天神地祇八百万神と有
る右の六座ハ何れも神名式に所見ある出羽國の官
社の全あり此に就て思ふに和名抄に出羽國國府在
平鹿郡と有て其郡名を擧たる所ハ出羽國府と有り
然れば古に其國衙の有けるハ出羽郡國なりし程に國
司の部内の神を祀る摂社なりけむ故に右の如く國
内の大小の神祇を祭れる古例の傳ハれるなり國に
國司の衙に近く摂社と云を定めて祭れる事ハ祈年
國幣などゝなりハ國司の行向ひて祭りけめとも年中

數度の恒祀に其廳務を措きて一に詣る事難きが
故に凡ての事の摂社に行ふ事なりし朝野群
載十八卷初任國司廳宣に一可勤社恒例神事事右國
中之政神事爲先專期如在之禮嚴尊須期部内之豊饒
云ハせ二卷守國務事條に一神拜後擇吉日時初行政
事云ハせと有る神事ハ部内神社の祭禮を云ふ神拜と
ハ國中の官社を巡拜する事なり然れども出羽國に
ハ殊なる大國なるが故に官帳に載れる式社ハ僅
に九社なれども此を巡拜せむに百里ゆも及ぶ可
ければ新任の時の巡拜と雖も容易なるまとければ
況て二月の祈年國幣などハ一とに巡りべくも非れ
ば摂社なりて行ひけむし予が淡路國ふどハ和名抄
に國府在三原郡と有て今も國衙村と云が有ハ正し
く國廳の在し所なるが其より二里許に十一箇所村
と云に摂社大明神と云ハ國司の摂所なり其村名
を十一箇所と云に考有り其ハ神名式に淡路國十三
座大二座小十一座と有る其大二座ハ國司の神事毎
に自行向に可ければ殊更に遥宮に及ばず事な
ら殊の小十一座を摂社に祀れる故に其即村名と
ハ成れるなり此に例して楫尾神社の祭神の考出来

わが次ぎに見よ　右の如く國司の部内の諸神を祀れる想社
なるべし　神名式に名神大と爲るは大物忌神
月山神なるは主と祭る可きに小物忌神を主と爲る
事は如何なるか　右の両社は國衙より程の遠くも
非るが故に恒例の神事には國司の自參勤め可けれ
ば飛鳴に在れ何處に在れ小物忌神は石の二社に亞
て其國にては主たる神に坐が故に此神を本と定め
て右の二神を相殿と定め又其部内の六社と大小神
祇とも合せ祭れる者なりけり然ころ社說に小物忌
神社とあるも決に所縁無して云事には非りけり　揭

動　泥　湟　凍　敬　遷　尚

○元亨式に後に大滝元賢云々元亨天皇實録に仁和三年五月云々出羽守從五位下坂上大宿禰小國府を移す云々出羽國府は在出羽郡井口地郡是なり延暦年中に所建也仁和三年地大震海嘯溺死之海水溢出府六里所大川崩壞公私一町餘埋沒之期在於旦暮望請遷建寛上郡大山郷保賓土野村其除国避彼危殆者事大聖国國宰解狀訴數事情曰避水遷高之儀難得其宜去年出水国内其便何者寛上郡地在國南皇遷有益焉自河而通是水陸并終有運漕之利寒風緩涼曾无向道之期況復松田城勝城相公已逐烽候不堪之以況論之事難可驚訝高敏之道側高敏之地小建べく御事有しかば其ゆえ爲し、然に物忌の近側高敏の地小建べく御事有しかば其ゆえ爲し、然に物忌の如く寛上郡大山郷小國府を移さるべく宮小宮元しかつ然れども高麗府の近側高敏の地小建べく御事有しかば其ゆえ爲し、然に物忌内でかれこれ占寛上郡小国府に引たかしと云ふ移すとしては其大山と云ふ郷名なれども此小宮元しかつて此も亦大山と云ふ郷名なるかも同じ郡の方なれば

尾と申すは松尾　揭尾あるいは云ふ同じく尾は岑なる可
し　揭尾と申す神社諸國に彼此有り山城國賀茂別雷
神社の攝社に揭尾社坐本宮坤權殿前と注進略記
に見えたり史官記に仁平三月十日七日賀茂別雷
社司言上去九月廿日申時大風御寶殿前奉祝揭尾明
神顛倒時被打破損舍屋等と見えたる是なり又三代
實録に元慶四年正月八日石見國揭尾國神帝世國社
神並授從五位下と有は何れの神なるか詳ならず又神名
式に伊賀國山田郡阿波神社を伊賀考に云物に今在
下阿波新撰生大明神と云う尾と生と別なれども次
に云ふ阿波國なるに引合すれば同じ可し神名
式阿波國勝浦郡勝占神社を今杉尾大明神と申し田
有て聞ゆるなり紀伊國名勝圖會に在田郡生石明神
の下に壹社に生石嶺の半腹に在て楠本村の生石神
社と同じく大海大彦二神を祀れりと云ひ或は伊勢
國三宮に坐して阿波國に在て　杉揭尾大明神とも云ふ此
神天慶元年正月十日阿波國人中尾藤九郎生石嶺に
勸請なる生石大明神と云ひけるを正暦元年社
を今の地に移し祭れり　杉揭尾明神の阿波國に

り渡給ふと云傳ハ當社のことゝ〻ず名草郡府中村か
も有うゝ」と云う古の伊勢國三宮詳ならず若くハ
古の伊賀國阿波神社か非ず故古の如く山城國
石見伊賀阿波紀伊等の國しか揖尾明神と申す社し
の有を何れを何れの神とも知べからざれども其社
號の同じきを以て此か引出たるか必同神と思べ
からず然れども小物忌神社をして風神級長津彦命級
長戸邊命と申すい猶强説の如く聞ゆるか就て深く
罰つか吹浦ふる大物忌神社縁起かも小物忌神社飛
嶋坐と云ひ古老の傳かも級長津彦命と云ハば後世
の僞説かい非ら可し廣瀬大忌神龍田風神を並祭り
せ給ふ如く殊か親しき御田縁の神か坐せば大物忌
神社か對へて小物忌神社と申せるい其大社を本と

て社か就て大小を別たる称あず有べき然れば彼社
の舊記か一王子揖尾大明神と申すも第一別宮なる
小物忌神社を勸請ふ社なる謂と聞えたり何かも有
れ今も風神か崇奉れる其神德か貴く高く御在し坐
て其神威の奴か奇しき靈驗の坐と以ても爭ふ可
らず又筆紙の及ぶ所かい非ると曉る可き者なり
世の神學者良も爲れバ式外の神とし云へバ物の數
かも足ぬ物の如く賤しめ茂如し奉る事か甚と可畏
く嗚呼ふる〻癖心ふる此御社莊内の大山村と云か坐
て部内の大社のて古ふる主面多く産子の村い若干
有り宮下村と云か社家多く住ひし醜りさ物ふるか
神宮寺と云か有も旧社なるか故ふる御贊奉る浦と
金澤村宮澤村と云と其ふる奉る魚と以て二月初戌
日國内式社の神と祭ふも二月祈年の國幣の

松杉の黄合ハる山の尾前小手社東ハ向ひて立給ふる風神祭詞か吾宮清朝日乃日向處夕日乃日隱處天乎ハ吾宮波定奉氏有か合へ乃し幽契有る事ふる可し

可し北を以て國司の衙より近き地に定祭たる出羽國の摂社なりと云説の強さるを知べし予天保十五年六月十五日初て大瀧光憲許行たる時詣たるに以來彼國に年々の如く行通ふ毎に常に親しく參拜し奉けるに大神の御靈の幸ひ昭然くして其御氏子に我業を資くる人共の多く成以て行て先に祝詞講義を許多に著述し今將眞盛に此御紀の傳を書成し仕奉る因縁の實に大縁なるに就て朝夕に起とに寢とに忘奉らず其方床しく常に偲奉る心より風神の御事を申す結めに大御社の事書記して千名の五百名に大神と顕し申すと也久詠り異しき事多れ

○飢時生兒の飢を夜波志と訓るは假字の違ひ有て夜和志なる可し或説に弱也と云る如く音通ひて與和志と然云つるなり名義集に饑飢の字共を宇恵とも伊比宇恵とも訓て夜波須とも訓て夜和波須とは無く宣化天皇

元年御紀に飢を伊比宇恵と訓ミ推古天皇御紀皇太子の御歌に伊比宇慧氏と有を釋に飢飯也略字也と見えたれば飯に宇恵給比志時と訓べき狀なれども言義を思ふに宇恵は食弱の意と聞ゆれば夜和志と云語の可借しきが故に猶舊訓に從ひつ又宣化天皇御紀に五年を伊比宇恵と伊比恵杯志とも訓り此の假字に正しく恵を用ひたるを外しある〻名義集も何も宇閑と有れば夜和志の假字の和なるとも波に誤れり此の二柱神の天降來坐り其始に彼別天神の如く隱身に御在しを磯馭盧嶋に天柱を化竪て八尋殿を化作給へる頃に漸に顕身の大神等と成給ひて其生坐る御子神等を

も顕身あて生出給へるあれば此れ於て顕身を容べ
き住處有べく裝ふ可き衣服有べく養ふ可き食物有
べく此三物を以て保たせ給ふ可き御命あり然れば
此時始て顕身かい食て活べき物の有將欲しく思ひ
し成つるあり次あるる黄泉の所か伊弉冊尊の吾已食
泉之竈矣と有と以て既く火食の事有しを曉る可し
此事已か傳七ニナ七丁か云ふ孔子家語か載たる玄家の古語か食氣者神明而壽食
穀者智慧而巧不食者不死而神と有とも思ふ可し此
ハ隱身と顕身と替ふ目の時の事なり尋常の見解と
成す可からず然れども此傳ハ決めて僻傳なる可し倉稲魂
命と申すい下か説る如く豐宇氣毘賣神の亦名なる

が第二一書か軻遇突智娶埴山姫生稚産靈と有る其
神の御子なれば此時未生坐べくも非れば誤なるを
古事記ハ其神を和久産巣日神の子と有ハ正しけれ
ども其も和久産巣日神とも大宣都比賣神をも此と
同じく伊邪那岐伊邪那美二神の御子と爲るハ共か
誤なり故其誤れる由來を借思るか此神等の未生出
坐ざるし以前か已か八尋殿を化作て宮殿の備有り
其時將衣服も裝束ひ御在うけむと所思る事ハ陽神
問陰神曰汝身有何成耶と有を以其體なるざりし
事知らるる此等ハ顕身と成給へる上ハ必無とハ

得有る物みて有られば殊に衣服にも宮殿にも
繫要と有べき物は食物なる故に其也二柱神の顕身
と現生り即出来りて飢〻く生ざりしと云る古語の
有けるに其神の成生る說と一に相混りて傳れ
る者多く有べしなりけり又崇神天皇九年に大忌
定と成れりしに廣瀬龍田と一に連ねる故に撰者
の心しらひみて風神と一に祭に給ふ御
如何なる為に倉稲魂命と二神の
御子と申す事正しからず可し○倉稲魂命第七一
書に此を注して倉稲魂此云宇加能美抱磨と有り大
殿祭詞屋船豐宇氣姫命の下に是稲靈也俗詞宇賀能
美多麻と所見たり姥姬命也記に豐受皇大神一座元

稲魂和名宇乃介乃美太萬

抱

丹波國與謝郡比沼山頂眞奈井原坐御饌津神倉稲魂
命是也と見え又同書及御鎮座傳記に調御倉神宇賀
能美多麻神坐亦號大宜都比賣神亦名保食神神祇官
社内坐御膳神是也と有り廣瀬社縁起に此一書を
引て倉稲魂命比廣瀬大忌神又曰若宇加乃賣命伊勢
外宮分身也と記せれば正しく豐宇氣毘賣神の亦名
なる事申すも更なり予先に古事記に須佐之男
說に此に擧たる傳共に誤なる可し其に某御魂神
と申す例に其事と掌給ふ主たる神坐る其功用と
輔相け奉る神に申す事なり譬へば天照大神の坐る
に天照御魂神の別に在すが如く豐宇氣毘賣神に稲
穀と掌給ふ主神に坐せば宇迦之御魂神に其功用を
輔相け奉る神なる事明然ければ此に倉稲魂命の御

名の百八碎傳あり可く思ひしハ甚し麁略なりけり
古史徴ハ倉稲魂命を豐宇氣毘賣神の亦名と定め
れりしハ甚愛たゝ〜と雖も須佐之男神の御子かも同
名の神を百と取しなりけるハ此も亦固陋なりや
又古事記ハ須佐之男命娶大山津見神之女名神大市
比賣生子大年神次宇迦之御魂神二柱と有と此の倉稲
魂命とハ同名なれ〜異神なり但其ハ二柱と有れど
也下ハ大年神の后神等を載たるハ宇迦之御魂神の
后神子神等の次次無ハ不審〜〜事なり因て思ふハ
上代本記ハ宇賀魂大年神一座と有と也記ハ宇迦
之御魂神と有て大年神とゝばかりを以考るハ此ハ大
年神の亦名なるが故ハ屋船久〜遲命などの例ハ重

復れる御名なり伊奈利社記三箇峯三座秘説ハ社記
云中倉稲魂命也即素戔嗚尊子母山祇女大上進雄尊
下大市姫以上三座神是尤秘中秘也神祇拾遺云弘長
六年加田中四大神爲五座也田中社者太田分身三峯
地主子一説云大己貴命四大神者四柱兒神也五十猛大屋姫
抓津姫事八十神也云し舊傳云當社素戔嗚尊鎮座其
一也然則揖此神愛水勿論事歟云〜と見え二十二社
神體秘記ハ稲荷神社中倉稲魂命左土祖神下大山
祇女と有ハ何れも大山祇女と有ハ其御祖ハ坐〜又
田中四大神の両社も共ハ素戔嗚尊の御子神たる由

△和名抄郡名に石見國邑知郡[おちち]と有大市[おほち]や神名帳に那賀郡大歳神社有し宮有けり若狭國[わかさ]に大飯郡大飯神社有り紀伊國[きのくに]名草神社祝詞に大飯大酒作豊明[とよあかり]仕まと見え山城國賀茂神社記に同日神と中[なか]すハ御年神と五事[いつこと]なり可しと同ハ歳[とし]の神と同じ[おなじ]ものなるに大飯[おほいい]神と事[こと]の神ハ是也[これなり]御名[みな]ハ何[なに]ものか

△此両社の御車傳三十巻六百九十丁に云へし

緒を思合せて此の倉稲魂命の外に別に素戔嗚尊の御子神に坐る倉稲魂命と申す神の坐事を暁り可き者あり。此同名異神の御坐す事を先心得ずて其説に躓きが故に先此に引ハ次記せるなり

社説に田中ハ神名式なる飛鳥田神社なり四大神ハ御諸神社なりと云り△又社記に大歳今田中殿客人神也故想于此神降臨砌化鶴[つるに]倉稲實[みのり]来現云々と有ハ山城風土記に称伊奈利者秦中家忌寸等遠祖伊侶具積稲梁有富祐仍用餅為的者化成白鳥飛翔居山峯子生遂為社云々と有る此なり河海抄に空蟬巻に引れたる風土記に南鳥部里称鳥部者秦公伊呂具的餅化鳥飛去居其所森今鳥部と有を思合すべし豊後風土記に景行天皇の中臣村に往到坐し所に忌有白鳥飛来云々鳥化為餅片時之間化芋草数千株云々と有り又体姫命世記に垂仁天皇廿七年戊午秋九月鳥鳴聲高聞豆畫夜不止云々鳴國伊雜方上葦原中有稲一基云々彼稲白真名鶴咋持廻乍鳴

支云々倭姫命云々彼鶴真鳥宇號称大歳神云々と有ハ大歳神の白真名鶴に化給へる云々右の社記に大歳神云々化鶴と云事考合す可し遠江風土記に磐田郡田中神社主田六十八東敏達天皇四年乙未六月所祭宇加御霊也と有ハ右の田中殿云々の事に田有む事明き者ハ一神なる事ハ一神也之御魂神ハ荷神社の祭神を記しあり然れハ二十二社注式に稲荷神社の祭神を記したる也中社倉稲魂命神播百谷神也一名豊宇氣姫命大和國廣瀬大明神伊勢外宮同体神名比咩大明神と云ハ葛城[かつらき]に僻事なり伊勢内宮同体と有ハ外宮を誤れる也云々思ふに春日平野の相殿に坐比咩神ハ其后神に坐ると近世に天照太神と云説の出来れり其に依れる者なり云ふも足ざる事なり然れども稲食霊神に生事ハ古文なる可し真ハ此の倉稲魂命ハ播百谷神也と有事ハ如く彼宇迦之御魂神ハ其を播生し耕作給ふ神に坐さハなり如此く別神に坐さどり御名の等しく坐が為に偖宇外に倉稲又ハ生さどり混しき事多在り心為さし偖宇外に倉稲又ハ稲魂又ハ食なりの字を用ひられ又豊宇氣毘賣神

ゐどの字ゆを唯食物の事と思ふハ字義ふ依て心狹く思取れる者ゆて其説の違へるハ非ゝゝと傳九五十ふ註せる如く字ゆハ生毛ゆて木を生し草を生し成給ひて顕見蒼生の爲ふ衣食住の資と成給ふ故ふ其毛を用ふる住宅ふ在處住處直處と云ふ如又ハ大宅也倉ゐどと云ふ祁是ゐる衣服ふハ着物と云ひ用言ふ祁流とも云ひ食物ふハ殘ふ御饌とも御食津神とも申せる常の事ゐれば今云ふ限ふ非ず猶右の字ゆの字を生とし説るハ四時祭式鎮魂祭條ふハ此神を御膳魂と有ハ産靈の義ゐる其ふ據て説を成せるゐる古語拾遺ふ手置帆負彦狭知二神の事を記して其爲今在紀伊國名草郡御木麁香二郷採材齋部所居謂之麁香と有る下ふ古語正殿謂之麁香記御木を美祁と訓來ゝるハ古事記風木津別之忍男神の下ふ訓末曰豆と見元又和名抄ふ上野加三豆ケ乃下野之毛豆ケ乃と有も毛野國と云事ゆて木の生たる爲毛ケと見元集解ふ古記曰土毛謂草木也其地所生皆謂之地毛書國所出皆是土毛耳と有ゆ予が淡路國ふハ田ゐを苗と植附ると毛附と云ひ其苗の葉たる毛を見と云ふ他國ふて檢見と云る是ゐる此等ハ皆古言ゆて義解の趣ゆも合ゆ此等の事を叢脞しく云も言窮けれども考ゆ本著く所ゐる故ふゆる魂を美地磨と訓るハ恩頼の意ゐる字氣を主ゆ給ふ大神と生て其恩頼を合蒙給ふ事ゆて神武天皇四年御紀ふ詔曰我皇祖之靈也自天降鑒助

◎史記註ふ地境埴不生五穀曰不毛又謂之窮髮と有ゆ此事列子ふも見えたり

朕躬又垂仁天皇九十九年御紀ニ頼聖帝之神靈又景
行天皇二十八年御紀ニ頼天皇之神靈又顕宗天皇二
年御紀ニ奉天之靈と見えたる靈又神靈と同ト意ニ
ハ和名抄ニ靈日本紀云美太萬一云美加又用魂魄二字
と有ハ右等の靈字の訓なる可し然(リ)てハ美加豆と
も訓べくいとる万葉五二十ニ阿我農斯能美多麻多麻
比氏又十八二十ニ皇御祖乃御靈多須氣氏あど有ル
此等を合せて其字ハの神と至て其御靈の助幸ひ給
ひて其御霊を今蒙給ふ故ニ美挹磐と申す言義を
曉り可き者なり一條大閤御説ニ恩頼謂利澤之可頼也と説給へるハ然る事

△又同式ニ常陸國稲村神社ハ猶美多麻と云事ハ決めて深き由緒有る事ニ
時祭式四月祭條ニ廣瀬龍田二神を相並ベて祭ル記ニ
給へるハ等しくなる可し續後紀ニ嘉祥二年夏四月甲
子朔庚寅常陸國久慈郡稲村神預之官社縁水旱疫時
祈必致感と見え三代實録ニ元慶二年八月二十三日丙戌授
常陸國正六位上稲村神從五位下仁和元年五月十二日天
常陸國從五位下授從五位上亦有ル是ハ社鎮座ニ在
保内郷下野宮ニ初在上稲村也所祭面足尊惶根尊級長戸邊
命二神也と云ハ然れとも其ハ風神ハ風神宮御座ニ祭ル忌部
て思ハ面足尊惶根尊と云ハ非ル事ニて正しく右の廣瀬
と同神ニ御在し坐す事申ハ東國史ニ多ク有ル(例ハ御神二十三尾の社ニ有り)
稲村ニ云ふが如く常陸風土記ニ筑波岳所在を号六社
又此稲村神社の傳ニ筑波郡邊南也弘安元年豊足命詞下中
口神の御事を申す所ニ准らへて由有る事共なり

名曰頑魚云ト得八尺白蛤一貝磐鹿六鴈命捧件二種
之物六鴈令料理天將仕奉止白天鳥膾及煮焼雑造盛

朕躬又垂仁天皇九十九年御紀ニ頼聖帝之神靈又景
行天皇二十八年御紀ニ頼天皇之神靈又顕宗天皇二
年御紀ニ奉天之靈と見えたる靈又神靈と同ト意ニ
て和名抄ニ靈日本紀云美太萬一云美加又用魂魄二字
と有ハ右等の靈字の訓なる可し然(リ)てハ美加豆と
も訓やくこと万葉五ニ十ニ丁ニ阿我農斯能美多麻多麻
比氐又十八ニ十ニ丁ニ皇御祖乃御靈多須氐氣氐ゑど有ウ
此等を合せて其字ハの神と至て其御靈の助幸ひ給
ひて其御護を令蒙給ふ故ニ美地磨と申す言義を
覩る可き者あるべし一條大閤御説ニ恩頼謂利澤之可頼也と説給へるハ然る事

ゑるゑ猶美多麻と云事ニハ決めて深き由緒有る事ニ
るゑ真ハ傳ヒの十五丁八の三十八丁ニ委しく云ウ
神名式ニ大和國廣瀬郡廣瀬坐和加宇加賣命神社名神
大月次と有ハ此大神ニ坐す事已ニ傳九五十四丁ニ註る
ゑ如し然るニ天武天皇御紀ニ祭大忌神於廣瀬河曲
と有ニ就て思得たる事ゑも有けり其ハ高橋氏文ニ
掛畏巻向日代宮御宇大足彦忍代別天皇五十三年云
ゑ入東國冬十月到于上総國安房淳嶋宮云ゑ磐鹿六
鴈命以角弭之弓當遊魚之中即著弭而出忽獲數隻仍
名曰頑魚云ゑ得八尺白蛤一貝磐鹿六鴈命捧件二種
之物六鴈令料理天將仕奉正白天鳥膾及煮焼雑造盛

天見河曲山桂葉（天）高次八枚刺作見眞木葉（天平次八枚刺作天云々）是時上總國安房大神乎御食都神止坐奉（天云々）供御食供奉始支と有り細書ハ但之安房大神爲御食津神者今大膳職祭神也と有り此安房大神と申すハ其本國ハ坐る大宜都比賣神を神武天皇の大（大）御代ハ阿波忌部の移りて總國の安房郡ハ居る程ハ齋奉れり〻ある可し和名抄郷名ハ安房國安房郡河曲（加波和）と有り也有る事ハ若て其安房大神ハ其〻京ハ迎へて大膳職式ハ宗奉る事と成り其即神名式ハ大膳職坐神三座の中ある御食津神社是ハ

り三代實録ハ貞觀（元）元年正月廿七日甲申奉授大膳職從四位上御食津神從三位と見ゆ稍傳六百十八丁ハ云ふ但大膳職式ハ御膳神八座云〻但御膳神二月十一月上酉日祭之と有り此八座と云事ハ右の氏文ハ安房大神乎御食都神止坐奉天云〻大八洲ハ像天八乎止古八乎止哮定天神齋大嘗等供奉始支て有ハ依れり者ある可し

○又生海神等ハ下ある祓除條ハ沈濯於海底因以生神號曰底津ヱ童命又潛濯於潮中因以生神號曰表津ヱ童命と有る此三神を指云故ハ海神等とハ云るれど其生坐る所ハ出たらるもハ同じ事と再云ハ及ぶまじき事ある也と此ハ五ハ文の錯乱たり〻者ある古事記

也然り身滌段に古の三神ハ出たるに其より以前に既生國竟更生神と有る十神の中に次生海神名大綿津見神次生水戸神名云と有を記傳五二十に辨るわたるが如く古の十神ハ身滌の度に成生る神名の混乱れて別神の如く重復たる傳るれハ此一書も共に誤れる事物忽そ者ふ第十一一書に祓除條に至て具海神と共に生生し磐土命底土命赤土命と記されて忽後に吹生大地海原之諸神共と有る海原神ハ此るる海神ふるる可し○次童命古事記に大綿津見神と作る姓氏録に綿積命とも大和多羅命とも海神綿積豊玉彦神とも書り次童学ハ通證に博物志西海神童張華詩有海童邊路註海神也と有が如し又万葉に

△二十六丁に海若之奥津玉藻之又海若之奥に生有十

海若学を用ひたり其も文選注に海神也と有れども忽云けりと此に海神の御名に當られたるハ甚しき事共なり偖綿津見ハ曲津海と云事にて唯に海神と云に等しく可し大海を忽云る例ハ万葉一十二に渡津海乃豊旗雲に三十丁に海若之奥に持行而十五丁に和多都美能於伎都之良奈美又十九丁に和多都美能於伎都奈波能理あと見元たる是海神に云るハ三十五丁に綿津海乃手二巻四而有玉手次七二十九丁に海神手纏持在玉故又海神持在白玉あと有に神の裝束に就て云る十六丁に海神之殿蓋に十八三十三丁に和多都海能於枳都美度敞に有に其宮

殿と詠るあり三十九丁に海若者璽寸物者乞と有ハ海神の所作とあり十七丁に海神心不得と云ハ其(神心)を畏りあり九二十九丁贈入唐使歌に海若之何神幸齋祈者歟往方毛来方毛船之早兼と有る耳ゞ廣く海中の(諸)神を指るゆへ有けり此等を以思ふに賀茂翁説に綿津見ハ海津持の義と云ハ(ヒ)ふ依るゆ其神名を海名に用ひたるなり可く先に思ひしりぬも其に委しう(ま)おうけり然れバ綿津見とハ其地所の称にして其主宰り給ふ神を命でも神とも申せるなり日御月神山神川神なども(ど)の例とも思通して知べし偖大海を和多都美と云ふ和多ハ渡なり可く思ひて傳ハ三十丁に且と云ハれども猶

熟思ふに海ハ此國土を圍繞ける物なれバ曲の意なり可く神武天皇御紀の曲浦を私記に謂海曲也と有と万葉一十七丁に志我能一云比良大和太ゆど有り是なり然るハ祈年祭詞に鹽沫能留極と有ハ此大地ハ圓體なる物なりて其外圍ハ悉く滄海なりて國土ハ其中に僅に嶋嶼の如くして其處此處に在り所以に鹽沫の留極と云て國の際限を云称なり此を以て大海の曲なれる事を知べし又青海原者棹梶不干舟艫能至留極と有も石の如くなりて棹梶不干して榜巡るとも環の端無が如くして終に其究り無き謂なり

此も亦萬國の全を云事已ふ祝詞講義ふ說るが如し
此も海の曲ふる證る猶目易きい万葉三十九丁羇旅
歌ふ海若者靈寸物者淡路島中ふ立置而白波乎伊與
ふ回之座待月開乃門從者暮去者鹽乎今滿明去者鹽
乎今干と有り始ふ海神ハ靈し〳〵奇し〳〵御坐て浪を
回る〳〵潮を巡らして其中ふ嶋山を立置りと云事ふ
て此も亦海の曲ふる證ふる者ふり偖又海ハ渡て物
爲ふ所ふる故ふ又其義を含る事云も更ふり津ハ例
の處ふり海ハ大水ふる事已ふ傳六十九丁ふ云り又万葉ふ
浦曲磯曲ふど云る曲も海邊の曲ふりるを云ふり
綿と云も曲ふ東ねて物爲ふ曲の稱ふる可し但通證

ふ重滾貌如累綿也故万葉集以波浪喻
木綿之歌甚多ふ云る或說ハ笑ふ可し〳〵○山神等ハ第
八一書ふ伊弉諾尊斬軻遇突智命爲五段此各化成五山
祇一則首化爲大山祇二則身中化爲中山祇三則手化
爲麓山祇四則腰化爲正勝山祇五則足化爲離山祇と
有る五山祇を挙云故ふ山神等と記されたるふり可
きが此神等の生坐るハ此〳〵遥ふ後ふれば上ふり
海神等の例ふて正し〳〵ふるが故ふ古の如く軻遇突
智神の御骸〳〵ふ成坐し神ふ坐せども文を引上て此
ふ出せる故ふ下ふハ略ふれたる者ふり古事記ふハ
所殺迦具土神之於頭所成神名正鹿山津見神次於胸

所成神名淤縢山津見神次於腹所成神名奥山津見神
次於陰所成神名闇山津見神次於左手所成神名志藝
山津見神次於右手所成神名羽山津見神次於左足所
成神名原山津見神次於右足所成神名戸山津見神自
底山津見神至戸山津見神并八神と有ハ此の五山祇の異説かて其ハ
宜しけれども其も此と同ト く風神木神なるの次か
次生山神名大山津見神と有て伊邪那岐伊邪那美二
神の御子と為かハ共か誤あり予か説ハ第七一書大
山祇神の傳ふ云へ予先かい古事記か先大綿津見
津見神有り又上か太山津見神と出して下か八柱の綿
山津見神有り然れば其立宰と坐す大綿津見神大山

換抑

山植山姫と植安神
ハ共に山と安と云
源た紀其安ハ御子の美豆見
ご例て紀念ありと思ふ可
しかし山ハ一山

津見神ハ最前か成出御在して坐て其使令れ給ふ技神
ハ後か成生かか依て二方か御名の出たるかと思
ひしかども其ハ分身かして本霊ハて
申すとの差別無かしに程の短き四るかき 楮山とハ弥
真と云事かて神氣の盛なる由なり其ハ上かハ大ふ
る木共の雲を凌く迄高く生栄え下かハ金石を藏め
保持て寶か天下の至寶の生る所なる謂なり景行天
皇十七年御紀大御歌か夜摩苔波區珥能摩保邏摩多
ニ儺豆久阿烏伽枳夜摩許莽例屢夜摩苔之于漏破試
と山と倭とと兼て謡りせ給ひて國形の善ハしき事
を山を以詔言給ひ万葉一二十三丁藤原宮御井歌か日本
乃青香具山者日經乃大御門か春山霞之美佐備立有

畝火乃此美豆山者日緯能大御門ホ弥豆山跡ニ佐備
伊座耳爲之青菅山者背友乃大御門ホ宜名倍神佐備
立有名細吉野乃山者影友乃大御門ホ宜居ホ曾遠久
有家留と詠ラハ唯山の光景を並ヱルハ非ず神靈の
盛ナルを美称たるなり古人の山を愛る事の次縁ル
ものハ國土の秀氣の鍾れる地なるを以なり此を
以て山の言義を今弥眞ルるもとハ云なり又三卷詠不盡歌ホ
日本之山跡國乃鎮十方産神可聞賢十方成有山可聞
なと此外ホも多左り類聚國史ホ延暦二十四年十二
月丁巳勅ニ大和國畝火香山耳梨等山百姓任意伐損國
吏寛容不加制禁自今以後莫令更然と有ル山の神靈
の亡し事を惜くしませ給ハ[illegible]者なり類聚三代格ホ
弘仁十二年四月廿二日大政官符應禁制所損水邊山

林事右得大和國解� 産業之務非唯堰池浸潤之本水
木相生然則水邊山林必須繁茂何者大河之源其山欝
然小川之流其岳童焉宜知流之細大蔭山而生夫山出
雲雨河潤丘里山童毛盡谿流涸乾謹按大政官去大同
元年閏六月八日下五畿内七道諸國符偕古大臣宣勅
山川海島濱野林原等一切收入公私共之但山岳之体
或於國爲禮事須蕃茂如今伐損と有ル此大御勅を以
て山の神氣有ル趣を覩る可ルなり皇國の瑞穂國たる
事ハ人能知ルなれども瑞山の萬國ホ此類無く美好く
麗ハしき事を又のたまハ甚し不足口惜き事なり
○山祇ハ古事記ホ山津見と作り其正字ホて山を
所知者す神と申す事なり見の事ハ傳ハ二十ハ丁ホ云ル
万葉一十九丁ホ疊有青垣山山神乃奉御調等春部者花
挿頭持秋立者黄葉頭刺理一云黄葉云々山川毎依氏
奉流神乃御代鴨と有ル此ホて山神の御德を言盡せ

△ある山祇を通説は深沉約詩傳譯記山祇と百り然る事

釋

る者あり尚傳十一(卅)大山祇神の下に委しく註す可ければ其に任ねつ但記傳五に賀茂翁説に依て右其も悪しきまに非れども猶見を所知者す義に説れたり其方を予(卅)今取れる者あり○水門神等とは古事記に綿津見神の次に生水戸神名速秋津日子神次妹速秋津比賣神と有が如く男女二柱ある故に等とは申せるあり次に二神因河海持別生神云と見えて并せて八神を載たり是等を摠たるも有べし然れども此神等は此に入べき神なれども身滌段なり此に混入たる事記傳五に委しく辨られたるが如し又此水門神は妹妹二神に生ずて女神一柱なる可き考有て其

△記傳五十三に武烈天皇御紀大御歌に之衰世を手に滌灌手と有と分注有り於之門なれば神代紀の速吸名門を神武天皇御紀に速吸之門と有なれば知べしとされ又

は次なる速秋津日命の下に委しく云り水門とは川なり海へ水の落る處を云なり齊明天皇四年御紀大御歌に滌灌度能于之衰能矩娜利于娜倶娜利と詠せ給へるは水門の潮の下り海下りと云事なれば此は川水の海へ入る門なる事明らけし斯る所には船を泊て寄て泊る故に和名抄に湊説文云水上人所會也和名三奈止と有り借水門の門は門戸の戸に同じく言義は外なれども内に界たる意なり舍宅に戸と云は外なる内を圍こて内外の界なる謂なり其に門戸の字を分てれども共に同語なり和名抄に在城郭曰門在屋室曰戸と有り又水門後漢書云水門故處皆在河中日本紀私記云水門美止

と有れば美止とも云しかや今も川口なる處を水戸と云ひ又水戸口と云事常なり但古の漢書ふ云る水門ハ湊ふ非す城郭ふ云る水門なれば此の例ふ非ず字の同じき故ふ引るなり通證ふ出漢書為不疑傳と云り偖此ふ水門神等と云ひ古事記ふ水戸神と有て大祓詞ふハ荒鹽之鹽乃八百道の八鹽道之鹽乃八百會ふ座須速開都比咩止云神持可可呑氐と有ハ甚く違へりが如きと此ふ鈴屋大人の明辨有り其後釋ふ速秋津日子比賣二柱神ハ古事記ふ水戸神と有て此ふ鹽乃八百會ふ座須と云るハ甚く處違ひたれども是ふ深き由有り其ハ鹽乃八百會ハ此顯國の海上の堺ふて根國の方へ潮の没往く門口なれば是亦彼方の

水戸なり常ふ云ふ水戸ハ川より海へ水の落る口鹽乃八百會ハ海より入て根國の方へ水の落る口なれば此方ふて川より出る所と彼方へ出る所との差と有れ共ふ同じく水戸なる古傳の趣如なる事如是能く味ふ可し」と云れなり此說ふて甚能通元たり此ふて大きくもかさくも水門神ふ生事明らかなり若て此鹽乃八百會ハしも速吸名門なる事予が大祓詞講義ふ註せるを此ふハ第十二書ふ記べければ其ふ見合す可し　○速秋津日命大祓詞ふハ速開都比咩止云神と有て此古神の事無し後釋ふ此ハ彼御禊段ふ生坐る伊豆能賣神なり其伊豆ハ阿伎豆の切りたる御名なり即彼速秋津日子神

速秋津比賣神と同神なり秋は借字ふて明嚴の意ふり明とは御禊ふ依て清くふ清まりたる由の御名なり」と云ふ此なる説は甚妥〻き説なるか此ふ就て思ふふ水門神は女神一柱ふ〻て男神は坐ざる事明然し其は土神は鎮火祭詞ふ埴山姫と此の第二第三第四の一書ふ生土神と見元第一の一書ふ土神號埴安神と有て一神ふ坐を古事記ふは波迦夜須毘古神次波迦夜須毘賣神と二神ふ記せるを古史徵ふ波迦夜須毘古神と云名は孝元天皇の御子建波迦夜須毘古命の名と傳誤ふくるふが有べきと云れたるふか如く古書ふは然れども古事記ふ此速秋津日多在る者なれば然れども古事記ふ此速秋津日子速秋津比賣二神因河海持別而生神名沫那藝神次沫那美神次頬那藝神次頬那美神次天之水分神次國之水分神次天之久比奢母智神次國之久比奢母智神自沫那藝神至國之久比奢母智神此奢母智神并八神と有て此は妹妹嫁繼坐て御子を生坐る傳なり又同記ふ水戸神之孫櫛八玉神なども其孫神の傳きへ有ふ男神を除きて女神一柱と云は强たるが如く思ふ〻む人も有るめども其沫那藝神沫那美神は神世七代章ふ沫蕩尊と見元たる其正説なり伊弉諾尊なる可き由傳五三十九丁ふ註ふは此を除く可し又水分神は大倭神社注進狀ふ載る大神氏家牒ふ子守御母三島溝杭耳之女玉櫛姫と有て（出自の別なる）別神ふ坐事（水分神詞又神賀詞講義ふ云へれば此は除くべし）又久比奢母智神は鎮火祭

ふりと此下ふは闇靈神の下ふも云

ムと内宮儀式帳ニ津夫良神社大水神紀津夫良比古津夫良比賣命と有れハ其と見て此と除くとも妨無き可けれハ水門神ハ唯

記ニ水神・稚川茅埴山姫四種物ヲ生給ふと見え此等三一書ニ生天吉葛と有る其神ふる事傳九六十六丁ニ註れハ此も除く可し斯れハ殺ける神ハ頻那藝頻那美二神ふると其沫那藝沫那美二神と姑く同名異神と見て此四柱耳ふるハ河海ニ因て生る神ふらめど也速秋津比賣神の支族神ふる可けれハ女神一柱と見ても是能通ゆるふる若て水戸神之孫擣八玉神と有ハ此神天穗日命の后神と成て生る天夷鳥命ふるハ御子ふる可が其御饗を奉給ふ事の重きが故系と御母神の方ニ係て傳たる事下ニ云を見て知べ

系

き者ふる其ハ天忍穗耳尊の后神五依姫命ニ名丹倉姫命ハ天兒屋命萬幡豊秋津師姫命と夫婦の間ニ成る神ふれども何れも萬幡姫命の兒と爲ふハ其御母神ニ屬給ふ可き所由有と以ふる思誤々事勿れ其ハ出雲風土記出雲郡條ニ伊努郷國引坐意美豆努命御子赤衾伊努意保須美比古佐倭氣命之社即坐郷中故云伊努と有る意美豆努命ハ素戔嗚尊ニ坐ー意保須美比古佐倭氣命ハ此の熊野大岡命ニ坐て天穗日命ニ坐事次ふる瑞珠盟約章ニ就て說べし神名式ニ伊努神社同社神魂伊豆乃賣神社と有ハ后神と並坐ふて神魂と冠ふる奉れるハ其大神ニ屬坐る故ふる可し又秋鹿郡條ニ伊農郷出雲郡伊農郷坐赤衾伊農意保須美

又ハ其大神の御命ニて合せ給へるふるの

比古佐和氣能命之后天甕津日女命國巡行坐時至坐
此處而詔伊怒波夜詔故云伊勞と有り此と石の神名
式を合せて神魂伊豆乃賣命と天甕津日女命と同神
なる事自然灼然し甕ハ巖と同じく巖ハ物を巖くし
く齋清まハる由なり神武天皇御紀ハ朕親作顯齋用
汝爲齋主授以嚴媛之號と有り此を以て甕津日女と
伊豆乃賣と同じ趣なる事を曉り可し又風土記秋鹿
郡條ハ所以號秋鹿者郡家正北秋鹿日女命坐故云秋鹿矣と有り其
ハ何れの神とも知らねども秋鹿と云事若明處ハ
なるハ由有り古の神魂伊豆乃賣命を其大神ハ屬
坐と云ハ此御稜ハ成坐り柱津日神ハ高皇產靈尊ハ屬
直日神ハ神皇產靈尊ハ屬坐て世ハ幸給ふ事此卷末
ふと見て曉り可し怒れバ此も其例ハ當たり多かり

猶徵と爲べきハ古事記ハ大年神要神活須毘神之女
伊怒比賣生子向日神又要香用比賣生子御年神と有
る神活須毘神ハ此の熊野櫲樟日命ハて天穗日命ハ
坐事右ふ云るが如し其御女の伊怒比賣ハ右の伊農
波夜と宣ひし天甕津日女命の生坐る有り怒りハ向
日神紀記ハ向日神者神須佐之男命子大歲神要活須
日神之女神須治曜姬命生子也と有ればハ大年神の后
神の伊怒比賣と香用比賣とハ一ハて（其子の）向日神と御年
神と又一神なる事ハ知らるる（但此一件ハ怒しも用無き事の如しなる）
れども天穗日命と伊豆能賣神と御妹妹と成て生坐
る御女の事と云るが其御婚の大年神の事ハ下ハ徵

す可き事有
ば故なり倭姫命世記皇太神御遷幸の所に出雲神
子出雲建子命一名伊勢都彦神一名櫛玉命云と五十
鈴川後江に奉御饗と有り後江は即水門なるに櫛玉
命と櫛八玉命と同トきと其を出雲神子と云は天穂
日命の子孫の謂なるを國造本紀に相武國造志賀高
穴穂朝武藏國造祖神伊勢都彦命三世孫弟武彦命定
賜國造に古事記の天菩比命之子建比良鳥命此出雲
國造先祖志國造云と等之祖也と有と合すれば古事
引る水戸神之孫櫛八玉神と云事自然に相契合る者
なり又伊勢都彦神の住ひ多賀佐山嶺の邊は度會

郡沼木郷なり然るを出雲風土記に意宇郡野城驛條
野城大神坐故云野城と有と神名式に天穂日命神社
と有るども旁由有る事を思ひ定め可し又世記に瀧
原宮一座並宮一座と水戸神名速秋津日子神妹速秋
津比賣神是也と有は儀式帳に称天照太神遥宮と有
わば如何なる事の如くなれども其神も其地に鎮坐
し傳などの有けるか據ひ云る說なるべしも知べし
ずと雖も皆其所謂無き事に非ざるべし又儀式帳に朝熊
神社一處称神櫛玉命兒大歳云と有に大歳神と櫛
玉命兒と有は違へる事なるべし大歳神を祀れる事は
實なる事祝詞講義太神宮六月と次祭條に云へる又湯
田社一處称鳴宸電又大歳御祖命云へり又久麻良比神

社一處稱二大歳神兒千依比賣命云〻江神社一處稱二天
須婆留女命兒長口女命形五木又大歳御祖命形無又
宇加乃御玉同〻薩原神社大歳神兒佐々津比古命
又宇加乃御玉御祖命形無又伊加利比女命形無加努
弥神社大歳神兒猶依比女命形石坐ゐど有て古の式
社の神等ハ何れも大歳神又ハ其子神なり伊勢ハ多
く鎮坐り事も其婦翁と坐す天穂日命の由緒ハ依れ
り者ゐる可し然ゐを伊勢國ハ神武天皇東征の頃迄
も伊勢都彦神の主領さ居たりしを天日別命の合去
たるハ依て其神ハ東國ハ罷去りたり逆風土記ハ見
えたれども國造本紀ハ島津國造志賀高穴穂朝出雲
臣祖佐比祢宿祢足尼孫出雲笠屋命定賜國造と有り
島津ハ今志摩國なれば其子孫の留り居て國造ハ
任され奉りしなれ猶神武天皇御紀傳ハ云べきなり
偖此ハ古事記ハ水戸神等と此ハ水門神等と
有ハ共ハ誤なり女神一柱ハ御在しが天穂日命の
后神と成給ひし始終を明さしとて思ひ元ず長し
き說言を書く我さへ爲たりける怒れども餘りハ入組て叢脞
ゐ思ひ頗ひけり

○木祖神等ハ正書ハ生木祖句

句迴馳と續けたるを此ハ木祖神等と有ハ異なり傳
なり古事記ハ也生木神名久〻能智神と見え大殿祭
詞ハ屋船久〻遇命是木靈也と有て木神ハ一柱ハ坐を
木神等と云時ハ某句〻迴馳命と云が多き如く聞え
て如何ゐる事なり大山祇神と五山祇と有る例ハハ
此ハ准ら難ゐる可し又古事記ハ羽山戸神の子ハ
久〻年神久〻紀若室葛根神
有て其久〻ハ句〻迴馳の句〻ハ同トけれども其出
自の異なれば此の木神等と云列ハ立べきなれ
ば等字ハ若くハ衍文ハ善本を以て校正す可し

○土神號埴安神傳九三十ハ四丁

註せり神名式ハ大和國十市郡畝尾坐健土安神社大
次新と有て畝尾ハ古事記ハ香山之畝尾と有ハ如し
曹

○亦爲厳呪詛

案家漢語抄ハ平瓮比良加或八平賀又八十平賀云て埴安比咩之後代ニ尊之と有て埴の用を知へし

此ハ已ハ引る神武天皇御紀ハ取天香山之埴土以造八十平瓮躬自齋戒祭諸神遂得安定區宇放號取土之處曰埴安と有れハ此時初て祭給ふ如くなれど也前年九月の下ハ夢有天神訓之曰宜取天香山社中土以造天平瓮八十枚并造厳瓮而敬祭天神地祇と有れハ神代より鎮坐ましと更ハ此社の土を取給ひし祥ハ依て其神名を以て地名ハ負せ給へハ由有る

第七一書ハ伊弉諾尊坂劔斬軻遇突智爲三段云々其一段是爲大山祇神と有て天香山ハ其軻遇突智神の御骸より化ハる事師説を引て傳十一　十ハ註ハか

如し偖埴山姫神ハ其后神ハ生せハ本より副御在す可き理なるべし但其時の香山ハ天なる香山なるを後ハ其山の落て大和國ハ下れる ハ就てハ其山ハ由有る神等ハ又其山ハ相副て降生べき者なり崇神天皇十年御紀ハ吾聞武埴安彦之妻吾田媛來之取倭香山土裹領巾頭祈曰是倭國之物實物實此云望能志呂是以知有事焉非早圖必後之と有ハ謀反して國を奪ハんと爲る心有故ハ埴土を國の物實として取て呪詛を成せるなり此を以て此神ハ物ハ用ふる埴土のゆへハ非ず國を成れる土神なる事を知べし然れども國土を知者す謂ハ神なりと知べし傳九ハ非ず國土を成れる地盤○土神の下考合す可し三代實録ハ貞觀元年正月廿七

日甲申奉授大和國從五位下畝尾建土安神從五位上
と有り健と称奉れるハ彼歳咒詛を成て御軍ふ打勝
給ひしふるとうの事ある可し火神の后神と生せバ
稜威の甚可畏く御在す可き筈ある事傳九三十五丁ふ云
る丹生神の神威の事ふ思合す可ふ万葉一二十三丁藤
原宮御井歌ふ埴安乃堤上ふ在立之見之賜者二三十五丁
ふ埴安乃御門之原ふとも埴安乃池之堤之とも詠り
地是ふり今天香山の北麓池内村と云ふ即其埴安池
ふり被謂反さし武埴安彦も其地ふ住りし
故ふ取て名とハ
爲る省ふる可し○悉生萬物爲ハ上件國土山海草木
を除て凡宇宙ふ在と有ゆる萬物ハ悉くふ二神の生

生うと云傳ふり鎮火祭詞ふ國能八十國嶋能八十嶋
ふ生給比八百万神等ふ生給比氐麻奈弖子ふ火結神ふ
生給と見元たると此の悉生萬物爲ふ於火神軻遇突
智之生也云と有りと其續き様の同ゆきを合せ見
るふ此ハ萬物と其物を云て神と云ふ彼詞ハ八百万
神と其神を云て物を云ざるわバ互ひふ其意を通
ハして說べき所ふり磐華山蔭ふ此文を論ひて上下
の例皆其神と生と有わバ此も萬物の神ふる可けれ
ハ神字有ま欲し云わ云ふ實ふ怨る言ふり偖萬物と
ハ唯數の許多ふる事と云ふ常の事ふて大きくも廣

東京都文庫
帝國圖書館文庫

くも其限無きを云ふ万葉一又二ハ萬段顧爲作十
ど云ふ萬の例を見べし漢籍莊子ハ今計物之數不止
於萬而朝日萬物者以數之多物者號而讀之せと云ふ
も相似た事ある已ハ傳ハニナニ丁ハ云ふも如く二神の御子を
生坐し次序ハ最初ハ此ハ見元たる風神ハ成生し
うども其ハ御氣ハ化生る神ハ生り故ハ二神の御麻
奈子として生坐る長子ハ天照太神ハ渡らせ給ひ次
てハ素戔嗚神ハ月御ハ生坐る耳ハて珍子ハ此二柱ハ
限れるを鎮火祭詞ハ麻奈子ハ火結神子生給氏と
有れバ妹妹二柱嫁継給ひて生坐し御子ハ軻遇突智
神ハ終めハ御在しける麻奈子麻奈子の事傳

国立公文書館
National Archives of Japan